
拷問少女
Sadistic Girl
一迅社


拷問少女
Sadistic Girl



はじめに

他者の自由を奪いたい。
優越感に浸りたい。
そんなサディスティックな思いは、
誰しも心のどこかに隠しているはずです。

しかし、実際に行動に移してしまうと、
いろいろな意味で大変なことになってしまいます。

本著はそんなイケない欲望を
安全に満たすために誕生しました。

背徳感と、少しの罪悪感を
お楽しみください。

CONTENTS

CHAPTER.01　精神的な苦痛 005

異端者のフォーク 006
がみがみ女のくつわ 008
がみがみ女のバイオリン 010
コウノトリ 012
オーストリア式梯子 014
拷問台(ラック) 016
ピロリィ 018
ストック 020
ジベット 022
飲んだくれのマント 024
磔(洋風) 026
站籠 028
騒音責め 030

コラム：拘束マニュアル　道具編 032

CHAPTER.02　肉体的な苦痛 033

くすぐり責め 034
すし詰め 036
親指ネジ締め機 038
引きずり 040
ストラッパード 042
ムチ打ち 044
苦悩の梨 046
乳挟み 048
スパニッシュブーツ 050
編み上げ靴 052
石抱 054
炭火責め 056
釜茹で 058
ユダのゆりかご 060
鉄の処女 062

コラム：拘束マニュアル　縄編 064

CHAPTER.03　肉体&精神の苦痛 065
審問椅子 066
トラの椅子 068
車裂き刑 070
三角木馬 072
鋸挽 074
スカフィズム 076
水責め 078
水責め椅子 080
鍋責め 082
山羊責め 084
ヘビ責め 086
リッサの鉄柩 088
振り子ギロチン 090
ファラリスの雄牛 092

作家紹介 094



Chapter.01
精神的な苦痛

拷問で重要なのは、相手をいかに追い込んでいくかです。心の痛みはときとして、肉体への痛みを上回るもの。ここでは、人のプライドや精神を壊す拷問具を紹介します。


Illustration:蒼司

異端者のフォーク

発言することも叶わず、異端者はひたすら空を見上げる

拘束具としても使用できる拷問具です。両端がフォークのように尖った長い鉄を、顎の下と胸骨の間に固定して、紐やストラップなどで締め付けるようにして使用します。これを装着すると、頭を下ろした瞬間に、尖ったフォークの部分が顎や胸を突き刺すため、眠ることができなくなります。スペインの宗教裁判で数多く使用され、異端者はこの器具をつけられた状態では発言することができずに刑に処されてしまう事が多かったようです。



使用地域　ヴェネツィア
年代　16〜18世紀



両手を体の後ろで縛ります。その後、横になって休むことができないように、天井から吊るしましょう。首を反らせ、喉元を無防備な状態にします。



胸骨と顎の間に皮製のストラップで締め付けて固定します。この状態で頭を下ろせば、尖った部分が顎や胸に刺さって苦痛を与えます。

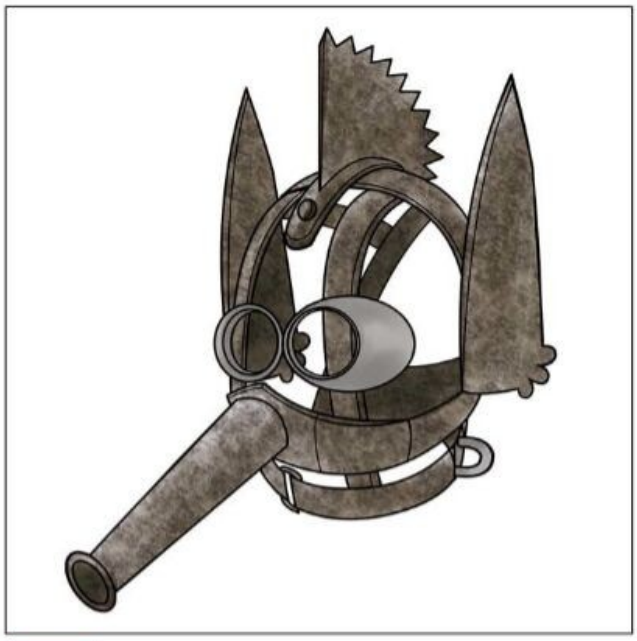


Illustration: まつやま登

がみがみ女のくつわ

いつも口うるさいあの女に、絶好のアイテム

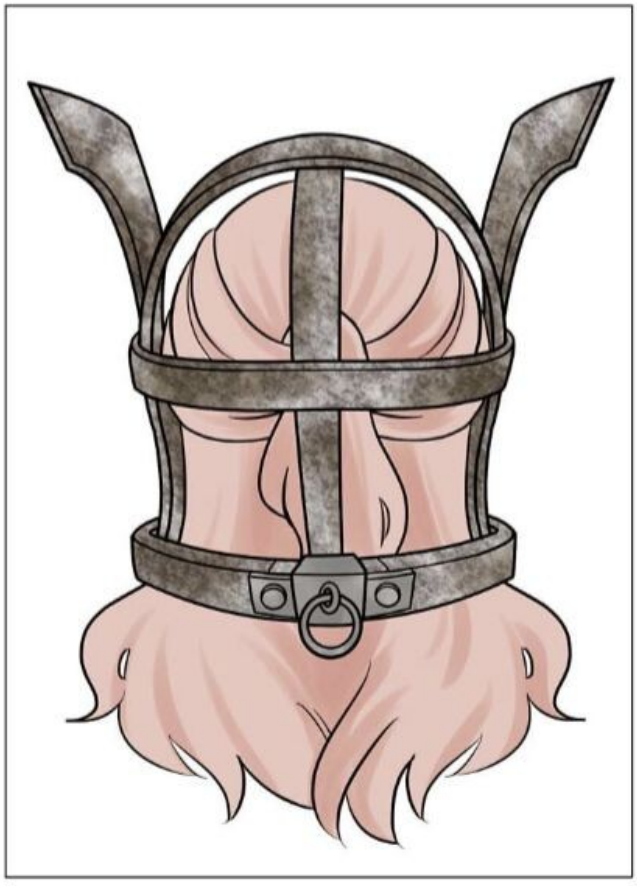
おしゃべりで口の減らない女を黙らせるために近世ヨーロッパで用いられた、女性専用の刑罰器具です。陰口を流す女性や、慣習に逆らったり男尊女卑に異論を唱えたりなど、当時の常識に反することを発言した場合に使用されました。下賤の生き物と考えられていた「ブタ」や「ロバ」をモチーフとしていましたが、後に実にさまざまなデザインのものが作られるようになり、芸術の域に達しているものもあるようです。



使用地域　ヨーロッパ
年代　16〜19世紀



抵抗されないように自由を奪い、無理やりくつわをつけます。愚かで卑しいとされていた動物やマイナスの印象を持たせるような仮面を被らせることで、いっそう惨めな気持ちを助長させましょう。



くつわの内側には鉄の突起がついていて、口の中に押しこめるようになっています。面を被らされたまま広場に鎖でつながれて晒し者にされます。


Illustration:風花

がみがみ女のバイオリン

恥辱のバイオリンが奏でる悲痛な叫び

その見た目から「バイオリン」と呼ばれている、女性専用の拘束器具です。首枷と手枷が一体化しているのが特徴です。拘束されると男性器をくわえ込んでいるような恥ずかしいポーズになり、その姿のまま晒されます。木製で非常に軽く、持ち運びが便利なため、軽罪に対しても容赦なく用いられました。また、その手軽さゆえに奴隷の拘束などにも使用されていました。



使用地域　ヨーロッパ・アメリカ

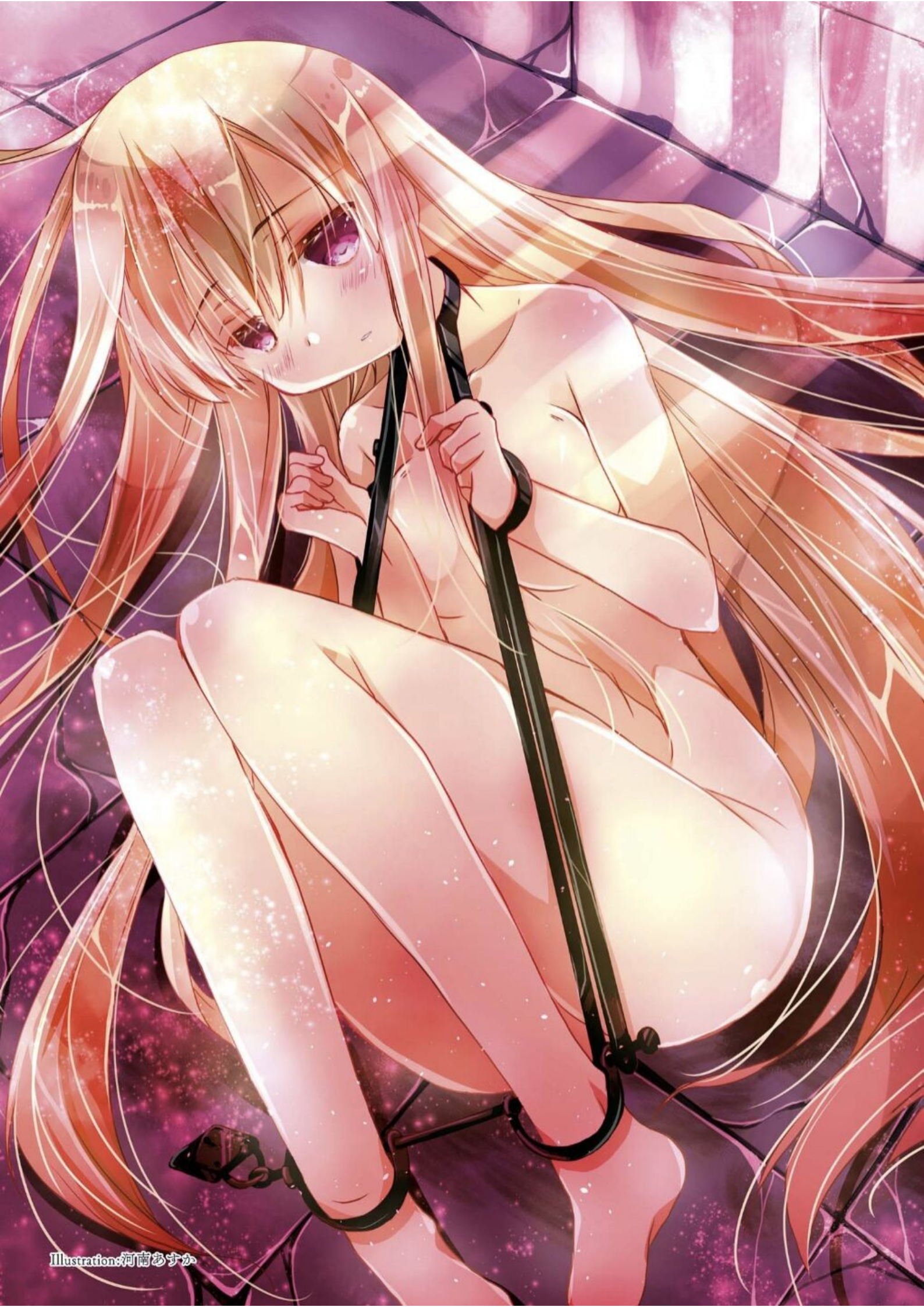
年代　16〜19世紀



大きい穴に首を、小さい穴には手をはめていきます。体勢が不安定になり上半身を自由に動かすことができなくなるように、あらかじめ穴の位置を調整しておきましょう。



首と手をはめて拘束具を閉じます。接合部を金具などできつく固定すると自分で外すことができなくなり、侮蔑に満ちた周囲の視線を受けたまま晒され続けることになります。口を塞ぐためにギャグ(口枷)なども併用されました。


Illustration:河南あすか

コウノトリ

名前には似ても似つかない残虐な殺人枷

イギリスでは「ハゲタカの娘」とも呼ばれている、身体的なダメージが大きい拘束具です。首、両手、両足を折りたたんで固定するため、体育座りをしたまま人体構造的に許される限度まで圧縮させられたような姿勢になります。身動き一つできない状態を強いられると、徐々に精神的苦痛も増していきます。長時間付けていると固定された手足、脊椎の痺れが全身に及び、そのうち呼吸障害が起って意識が混濁し始めます。



使用地域　ヨーロッパ
年代　16～18世紀



鉄製の首枷、手枷、足枷を鉄の棒で連結した形になっており、器具の先端に輪がついています。限界まで膝を胸元にひきつけ、首を折り曲げて全身を丸く縮めさせます。一見すると、体育座りの体勢に見えます。



狭くなっている先端部分の鉄輪に首を通します。支柱についてる輪に手首、足首と順番にはめて全身を固定します。支柱は手足を固定するだけでなく、膝を折り曲げた格好で足全体を固定する役割もあります。


Illustration:小倉小雪

オーストリア式梯子

梯子のようで、梯子にあらず

その名の通り、18世紀のオーストリアで開発された器具です。両手を体の後ろで固定されたまま下へ引っ張られ、肩を負傷するほど引き伸ばされます。巻き上げ式ローラーが付いているため、自重以上の負荷がかかり、更に強い力で引き伸ばすことができました。この巻き上げ式ローラーは梯子の下部についており、無理やり伸ばされた人は肩だけではなく全身のあらゆる箇所が壊されていたそうです。



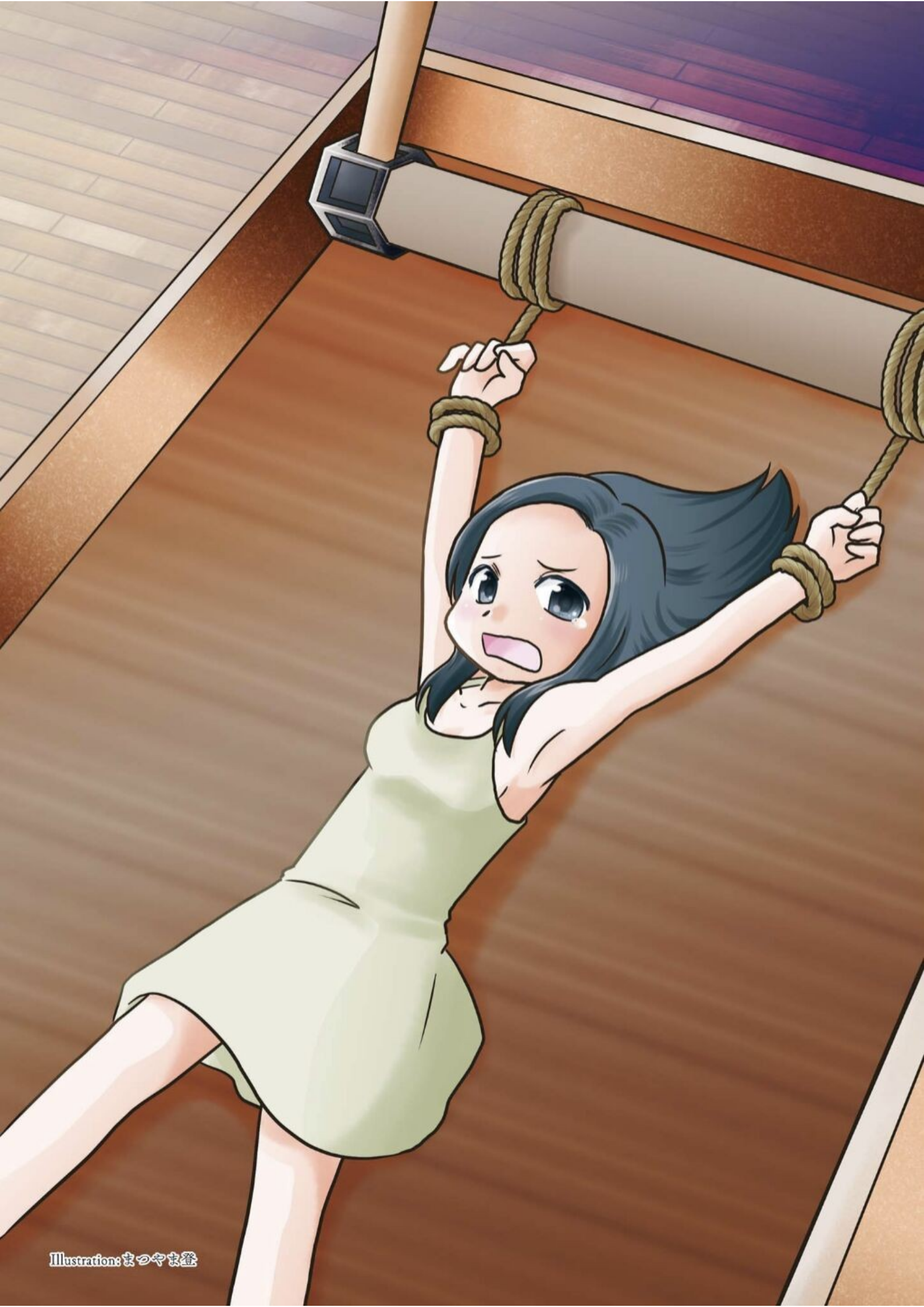
使用地域　オーストリア
年代　18世紀



両腕を体の後ろでまとめて縄で縛ります。斜め45度に立てかけておいた器具の上に乗せ、縛った腕を梯子の上部で固定させます。両足も縄で縛ります。



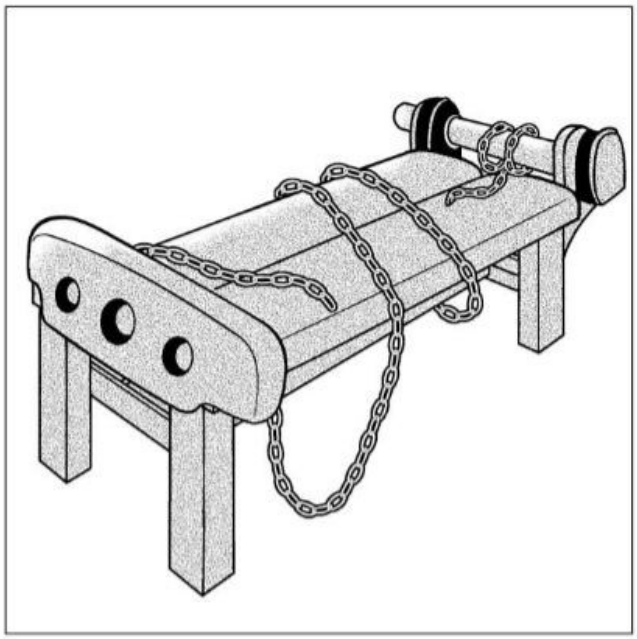
梯子の下部に取り付けてあるローラーに縄を括り付け、ローラーを回していきます。ローラーによって足を縛っていた縄が巻き取られ、体が無理やり引き伸ばされます。


Illustration:まつやま登

拷問台(ラック)

手足が伸びれば
八頭身も夢じゃない…？

「ラック」と呼ばれ、人間の四肢を引き伸ばし、苦痛を与える目的で作られた拷問台です。ヨーロッパ各地で頻繁に使用されており、紀元前の古代ギリシアには、すでにこの原型になるような拷問器具があったといわれています。また、できるだけ長く苦しみを与えて罪を認めさせるのが目的のため、必要以上に無理をさせない工夫も施されていたようです。過去の資料によれば、なんと30センチも伸びたという記録もあるとのこと。



使用地域　ヨーロッパ
年代　紀元前400年代～17世紀



両手、両足をそれぞれ縄できつく縛ります。仰向けに寝かせるようにして台の上に乗せ、身動きが取れないように固定します。両手を上げた状態になるように、縄の端を器具のローラー部分に取り付けます。



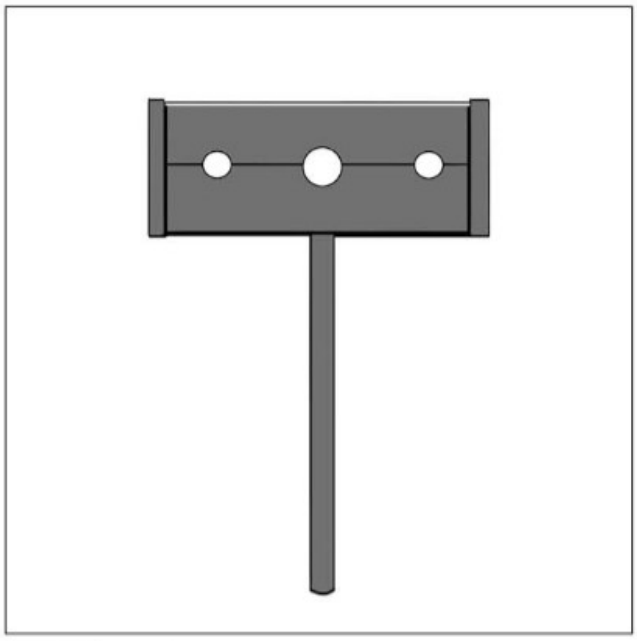
ローラーで縄を引っ張り、極限まで四肢を引き伸ばします。台によっては背中の部分に釘がついており、引っ張られるたびに釘が刺さる仕組みになっていました。また、台に寝かされた状態で、鞭で打たれることもあります。


Illustration:dieepzee

ピロリィ

鼻つまみ者は
群衆によって判決を下される

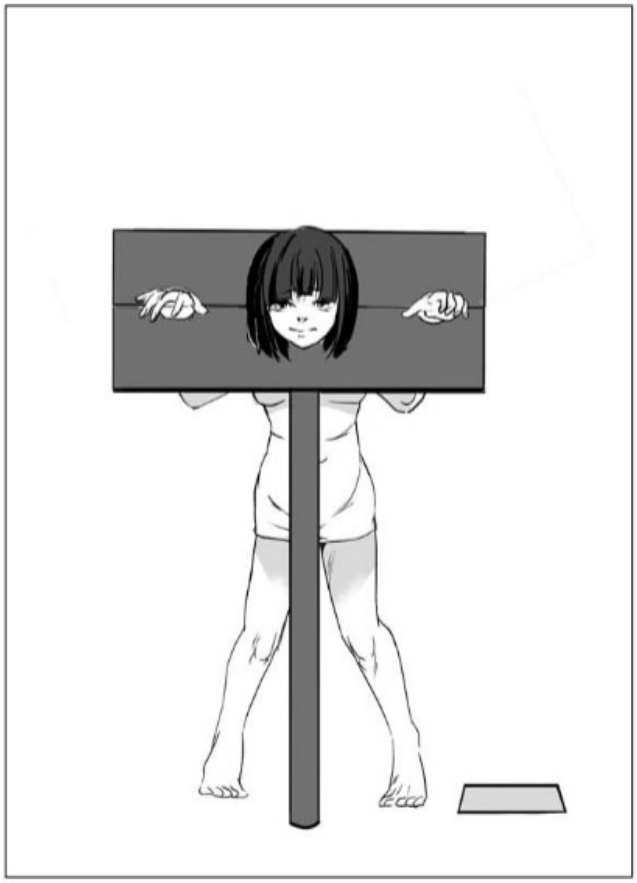
古くから世界中で使用されてきた、晒し刑のための器具です。無様な姿を群衆に晒して辱め、精神的なダメージを与えることを重要視しています。器具を付けた状態で移動できるので、街の主要箇所にあるさらし台やさらし棒に繋ぐことができました。女性に使用されることが多く、尻を突き出したような前屈姿勢で固定されます。広場などで長時間にわたり晒され続けるため、野次馬などに小突かれたり石を投げられたりすることもあったそうです。



使用地域　ヨーロッパ・アメリカ
年代　16世紀～現代



角材や板に穴を空け、半円ずつの穴になるように上下で分けます。半円の部分に首と両手を置いて、上下のパーツを合わせます。器具がなめらかではない場合は、首や手に傷を負うこともありました。



蝶番で板を固定します。その状態で市中を歩かせた後、さらし台に乗せて鎖で繋ぎます。すぐそばに罪状が詳細に記された立て札を置かれるため、野次馬に罵倒され、耐え難い恥辱を味わいます。

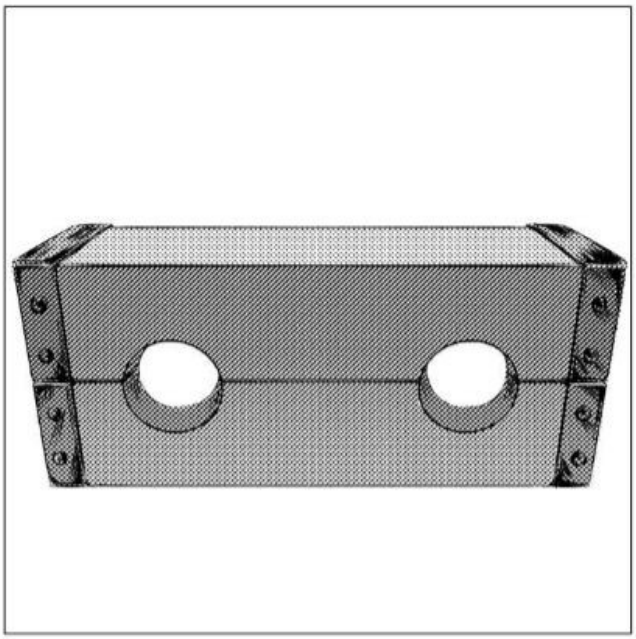


Illustration：あつ村まいこ

ストック

反省するまで座ったままで放置され続ける

ピロリィと同じ用途で用いられた足枷です。複数の受刑者を一度に晒すことができるので、拘束具としては効率的で実用性が高いです。2〜3m程の長さを持つ板に、手足をはめて固定するための穴が複数空いています。四肢のどの部分を穴に入れるかによって拘束力は変化します。フランスでは足枷台は不名誉な刑とされており、植民地時代のボストンで不当にストックに拘束されたことをきっかけに在住フランス人による暴動が起きたこともあったそうです。



使用地域　ヨーロッパ
年代　16〜18世紀



角材や板に穴を空け、半円ずつの穴になるように上下で分けます。半円の部分に両方の手足を置いて、上下のパーツを合わせます。複数の人間を拘束する場合、負担の大きい体勢で拘束されることもありました。



蝶番で板を固定します。比較的軽い刑であるため、もっと厳しい刑を科せられるところを恩赦によって免れ、この晒し刑を受ける者も少なくなかったようです。また、地位の高い者、富裕層などは罰金を支払うことによって免除されることもあったそうです。

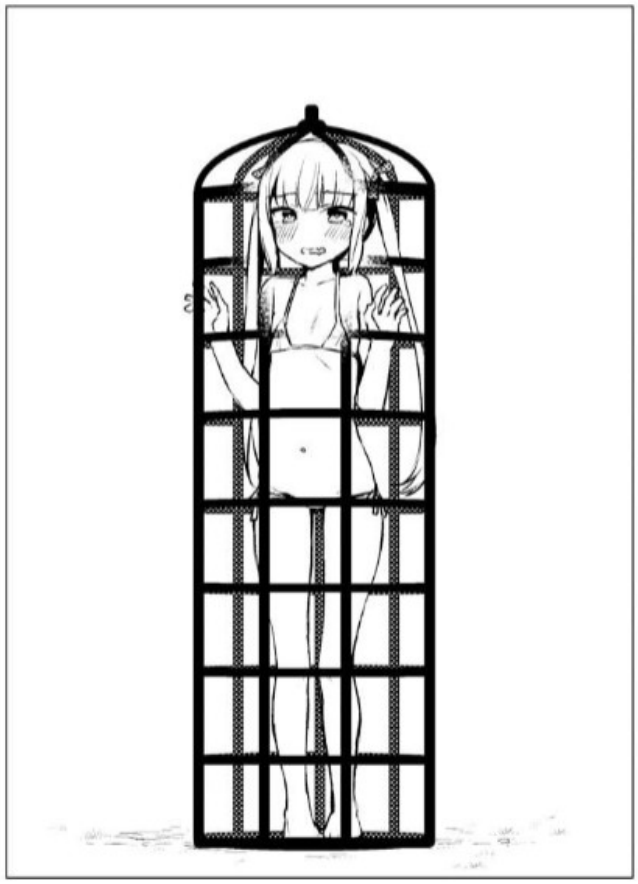

Illustration:未琴虫

ジベット

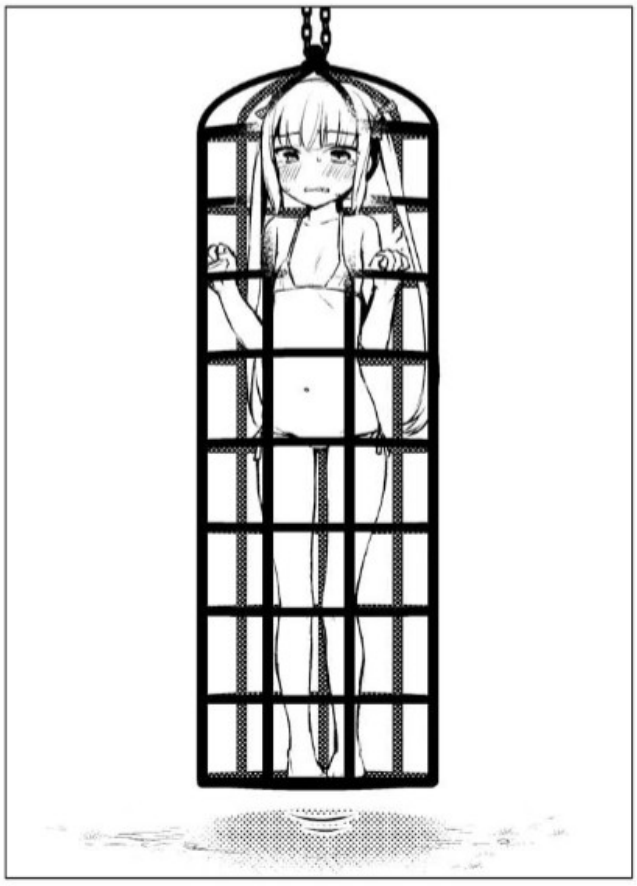
使用地域 ヨーロッパ　年代 16～19世紀

高所が好きなら耐えられるかも？

高い場所から吊るし晒し者にする「吊り籠」のような器具です。人の手が届かない程の高い位置から吊るされるため、日差しの強さや雨風などを遮るものがなく、天候によってもダメージを受けます。18世紀のヨーロッパでは市役所や裁判所、大聖堂などの主要な場所には必ず置いてありました。また、時代が進むごとに独自に改良され、檻の部分を人の形に変形させたような物も作られました。今もなお吊られた状態の吊り籠が存在しています。



衣服を剥ぎ取り、より身体的ダメージを受けやすい状態にします。一人がギリギリで入れる程度の籠の中に受刑者を閉じ込め、中から開けられないように施錠します。上部が円錐形になっているものが多く、視覚から圧迫感を与え、行動を制限されました。



高い位置まで籠を吊り上げ、群衆に向けて晒されます。木の籠は枠の隙間が大きいため、体をすり抜けさせることができましたが、飛び降りることができる高さではなく、より恐怖心を煽る作りとなっています。

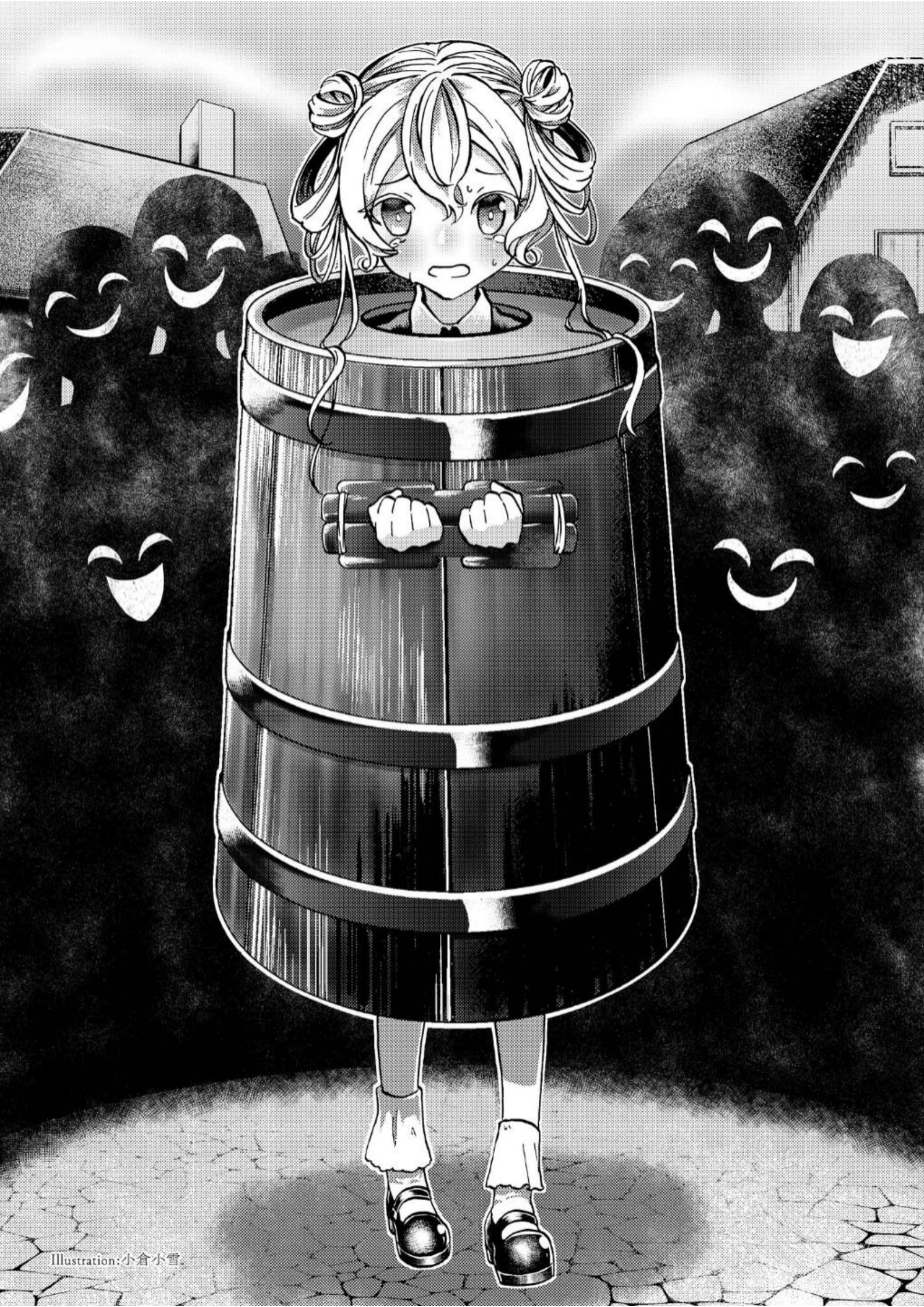


Illustration:小倉小雪。

飲んだくれのマント

飲んだくれのための おしおきマント

その名の通り、居酒屋に通いつめて他人に迷惑をかけた酔っ払いを処罰し、戒めるための器具です。酔っ払いを樽の中に入れ、足元が見えず歩きにくい状態で市中引き回しにされたり、汚物など入れられて屈辱を味わわせる晒し刑として使われました。ただでさえ重い樽を長時間被らさせるため疲労し、両手が使えないのでお酒どころか水さえも自力で飲むことができず、脱水症状に陥ります。「鉄の処女」の原型とも言われているそうです。



使用地域　ヨーロッパ
年代　17世紀



樽の底に穴を空けます。頭のみの場合もあれば、横から手を出すように作られているものもあります。手首までしか外に出せず、穴の位置に合わせて腕を曲げることになるため、より体への負担が大きかったようです。



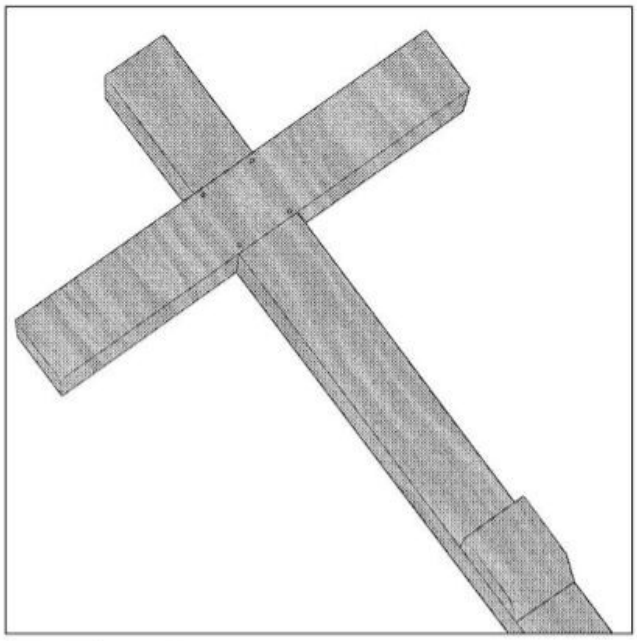
樽から頭と手だけを出したまま、公衆の前に晒します。バランスが取りにくいので歩行速度が遅くなる上に、樽を身に纏っている姿は嫌でも目立つため、より人々の注目を集めることになります。


Illustration:海栗

磔(洋風)

想像を絶するほどの、惨たらしい晒し刑

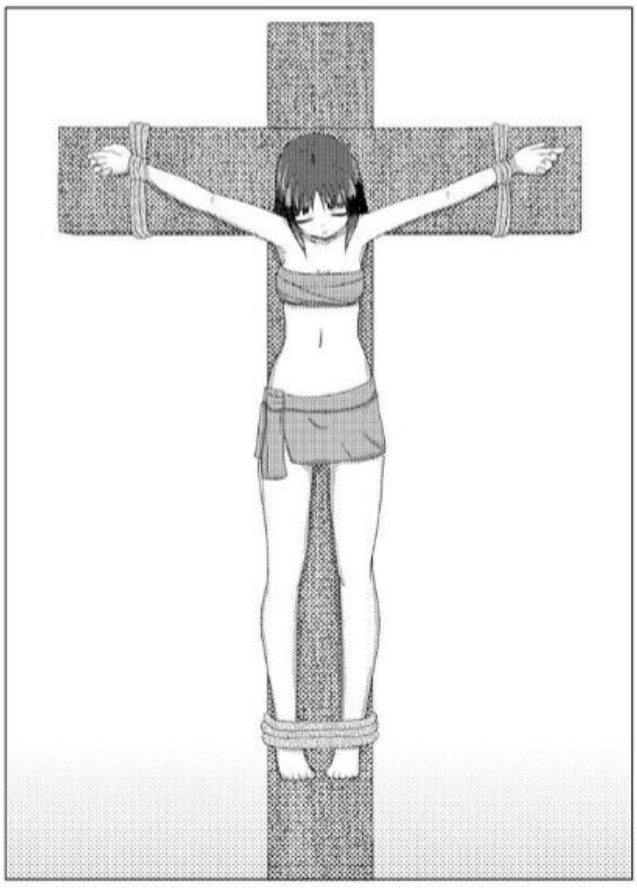
イエス・キリストの処刑に使われたとされる器具です。各国で古くから種々の形で存在しており、特に古代の地中海地域において広く行われていた晒し刑です。日本でも戦国～明治初期まで行われていました。十字形、I字形、X字形、Y字形、IとX字を組み合わせたものなど様々な形があり、刑の内容によって使い分けられます。受刑者は自力で刑場まで磔柱を運ばなければなりませんでした。磔にした後に鞭で打たれたり、石を投げつけられたりもしました。



使用地域　ヨーロッパ
年代　紀元前20年代～18世紀



磔柱を地面に置きます。縄で手首・上腕・足首・胸・腰部をズレ落ちないように磔柱に固縛し、磔柱を立てます。日本では磔にした後に槍で突き上げるため、両の乳房から脇腹を露出するよう衣類の一部を剥がれます。



あらかじめ地面に穴を掘らせておき、柱の下部を突き刺して垂直に立てます。徐々に両腕に自重がかかって受刑者は肩を痛めます。その結果、胸に自重がかかりはじめ、横隔膜の活動が妨げられて呼吸困難に陥ります。

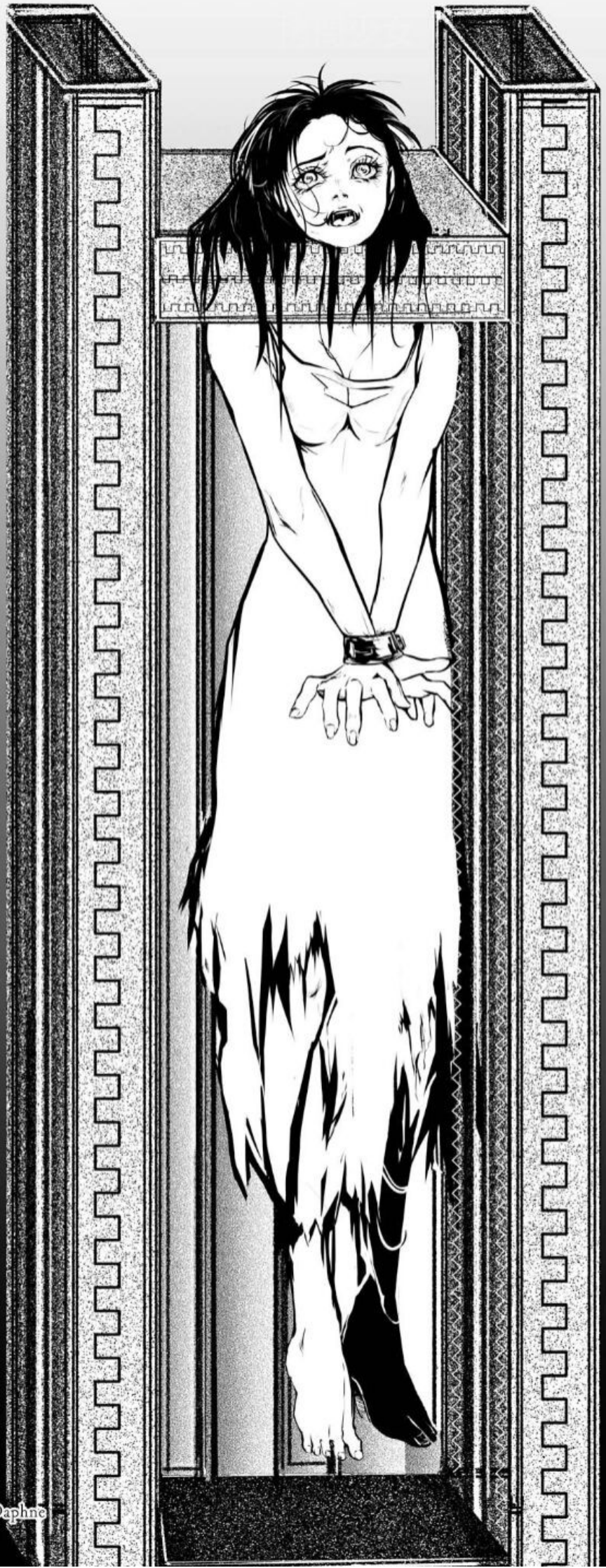
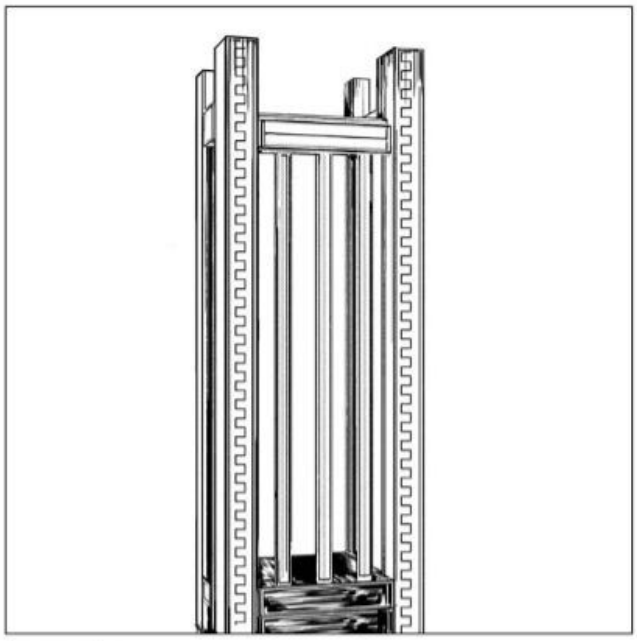


Illustration:Sophie Daphne

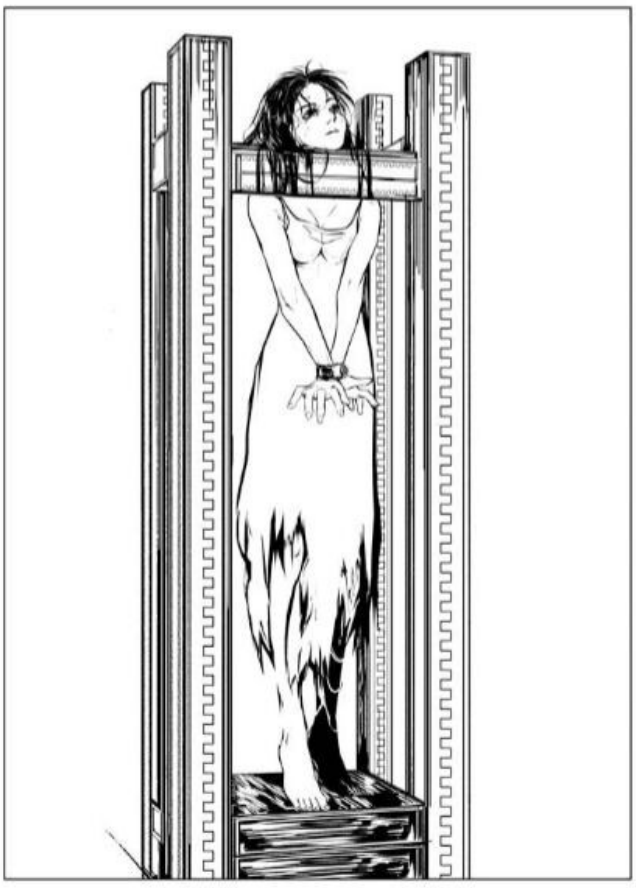
站籠

座ることは許されない、苦しみの立枷

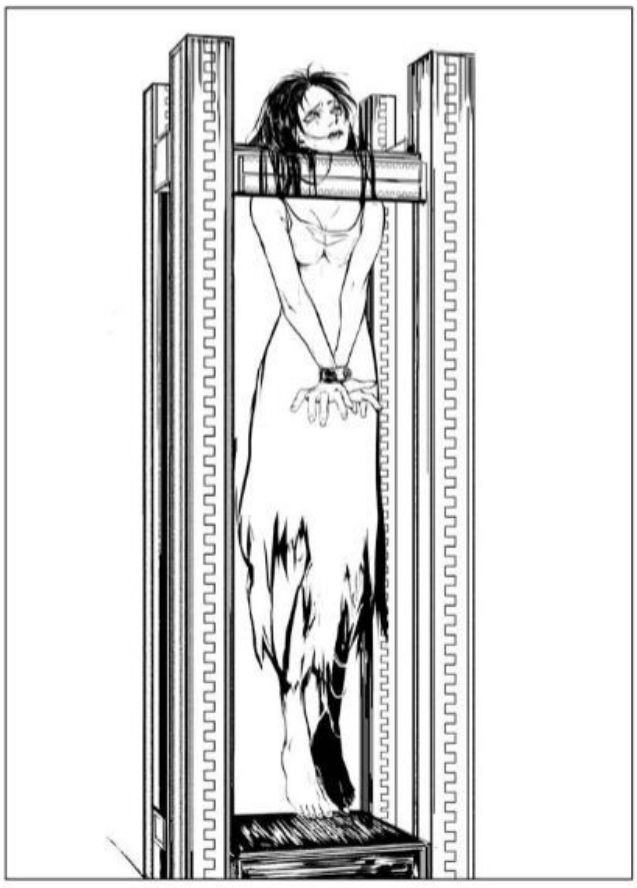
16世紀頃の中国で実際に使われていた残酷な拷問具です。一見すると縦長のカゴのような木でできている枷です。受刑者は上部にある穴から顔のみ出して晒されるので、見せしめとして使われていました。しかしいつからか、手を縛られ爪先立ちになるように足場の高さを調節するなど、より苦痛を伴うようなやり方へ変化を遂げました。全体重を首で支えることになり、ゆっくりと苦痛にもがき苦しむことになります。



使用地域　中国
年代　16世紀



両手を体の後ろで縛って拘束し、自由がきかない状態にします。木で作られている人間サイズのカゴのような器具の中に入れ、上部の穴から頭を出させます。その際、穴の枠に顎を乗せて位置を調整します。



爪先立ちになるように、足元の土台の高さを調節します。床の部分に石の板を重ねて置いておき、毎日1枚ずつ抜いていきます。やがて爪先が地面に届かなくなり、首で全体重を支えることになります。



Illustration:鳴奈

騒音責め

使用地域 世界各地　年代 20世紀～現代

絶えず騒音で責められ続け、聴力と正気を奪う

誰にでも、耳障りな音や他人の大声にイラッとした経験があることでしょう。それを尋問のテクニックとして応用した方法で、20世紀後半にCIAによって考案されました。長時間にわたり、耐えがたいほどの大音量で音楽や生理的に不快になるような音を聞かされ続け、徐々に正気を失っていきます。疲労や不安感、自律神経の失調といった症状が現れはじめるため、精神的なダメージが大きいです。不眠責めと併用して用いられることがあります。



抵抗されないよう、手足を縛って自由を奪います。その後、布などで目や顔全体を覆って視界を奪い、精神的な不安を煽ります。音漏れがないように、パッド部分を耳の上と前に合わせるようにヘッドホンを装着します。



準備していた曲を大音量でヘッドホンから流します。その音以外が聞こえないような状態にして、精神的苦痛を味わわせましょう。ロック・ヘヴィメタル系の曲や、工具や工業製品などのノイズ系の音を利用することが多いようです。

Column 拘束マニュアル 道具編

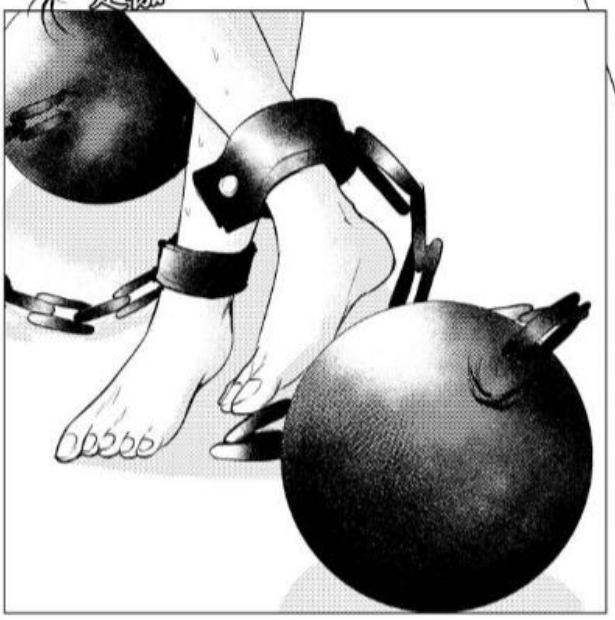
拘束具は、主に、罪人の自由を奪い、行動を制限するために使用されてきました。時代の移り変わりによってさまざまな拘束具が作られ、用途によって使い分けされていました。

手錠



鎖で繋がった鉄輪を両腕にはめ、両腕の自由を奪います。最もポピュラーな拘束具で、現在も警察などで被疑者を拘束する際に使用されています。

足枷



鉄球が繋がった鉄輪を足につける拘束具です。鉄球は3〜4キロほどで、囚人達が肉体労働をする時に脱走できないよう用いられていたそうです。

拘束衣



上半身の自由を奪うために着用させます。腕を体の前でひとまとめにして革ベルトで固定します。主に自傷行為の防止に用いられることが多かったそうです。

革手錠



鉛を織り込んだ革ベルトがついている手錠です。腰にベルトを装着し、ベルトについた革のリングに両手首を入れて固定します。左右の腕をそれぞれわけて拘束できます。



Chapter.02
肉体的な苦痛

人は、傷つくことを恐れます。その恐れをついて追い込む方法は、古今東西問わずに利用されています。この章では、肉体的に苦痛をあたえる拷問具を紹介していきます。



Illustration:小倉小雪

くすぐり責め

使用地域 日本　年代 江戸時代

反省するまで終わらない

主に遊郭から逃げ出した遊女に対して行われていた拷問です。体が資本である遊女たちには後遺症や痕が残るような傷はつけられないため、このような仕置を独自に生み出しました。見た目以上に苦しい責めで、延々とくすぐられていると咳き込み始め、やがて呼吸困難に陥って最後には気を失ってしまいます。場合によっては失禁してしまうこともあったとか。たとえ気絶しても遊女本人が罪を認めるまで、延々と続けられるそうです。



身動きがとれないように手足を拘束します。後ろ手に縛るとワキをくすぐることができなくなるため、頭の上で拘束するか、もしくは横に大きく広げた形で固定しましょう。



大勢で取り囲み、鳥の羽根や毛筆などでくすぐります。ワキや足の裏といった定番箇所に加え、腰やうなじなどの敏感な部分を中心に責めると、より効果が大きいです。


Illustration:

すし詰め

使用地域 日本　　年代 江戸時代

現代の満員電車も、ある意味拷問？

江戸時代に初めて牢獄が作られました。しかし、牢獄の大きさに対して収容できる人数をはるかに超えてるほどの罪人が入獄させられていたようで、そのストレスといったら安易に想像がつきます。そのうえ、不衛生な環境で疫病が流行したり、看守が気に入らない罪人を私刑することが許されていました。罪人にとって牢獄で暮らすこと自体が一種の拷問だったのかもしれません。



狭い檻を用意します。部屋に窓がある場合は見えないように隠したり、ライトを調節して薄暗くするなどして閉鎖的な部屋だという印象を与えましょう。



檻の中に人を詰め込んでいきます。場所を移動させたり空調を調節して温度を上げるなど、よりストレスを感じさせましょう。ギリギリしゃがめる程度に詰め込んだら、自力で出れないよう檻に鍵を掛けます。



Illustration:LiLish

親指ネジ締め機

軽くて小さくても
効果は絶大

ふたつの鉄片の間に親指を入れて潰すことを目的として作られた拷問具です。指の骨を折る、あるいは爪を剥がすなど、指を痛めつける拷問は、手軽に行えるため昔から重宝されていました。この拷問具もその中のひとつです。



使用地域　ヨーロッパ
年代　18～20世紀



器具の鉄片をある程度開き、親指を挟み込みます。この時に、爪の上に鉄片についている突起が来るように位置を調整すると、より苦痛を与えられます。



左右のネジを締めていき、親指に負荷を与えていきます。その後もネジを閉めるごとに苦痛を増大できます。


Illustration:LiLish

引きずり

使用地域 ヨーロッパ全域　年代 17世紀

天然のおろし金は切れ味抜群

西部劇などでよくみられるような、両手首を縄で縛られ、馬に引きずられる拷問です。山道などの砂利やでこぼこの多い路面で行われていたため、おろし金ですりおろされるような刑罰だと言われています。馬と紐さえあればできる上に、なかなか絶命することもなく激痛を持続でるので、世界各国で行われています。近年でも呪術信仰の高いナイジェリアやアフリカでは、魔女狩りの一環として行われていたそうです。



服を剥ぎ取り全裸に近い状態にします。そして、両手両足を縛ります。引きずっている際には、縄にも負荷がかかるので、解けないようしっかりと結びましょう。



足首、もしくは首に縄をくくりつけ、馬で引きずります。20世紀に中東・中央アジアでこの刑が行われた際には、自動車で犠牲者を引きずったそうです。

Illustration:鳴冬

ストラッパード

使用地域 世界各地　年代 中世

その日の気分でやり方を選べる

ストラッパード(吊るし責め)は一般的にもよく知られている拷問法です。世界各国でも頻繁に行われており、手足や腕、髪の毛などを縛って吊るすなど、実にさまざまなやり方が存在します。日本では重罪の者に対して自白させる方法として「釣るし責め」が使用されていました。後ろ手に腕を縛って吊るすと肩の関節に負担がかかるため、ほとんどの人が2時間ほどで気絶してしまったようです。



体の後ろに両腕を回し、両手が両肘に触れるぐらいまで交差させて縄で縛ります。素肌の場合は縄で縛る前に半紙を挟んでおくと、皮膚へのダメージが緩和されます。



縄を梁などに引っ掛けて吊るします。その状態のまま、1〜2時間を目安に放置します。吊るし方や縛る位置を変えると、ダメージを与えられる部位が異なってきます。

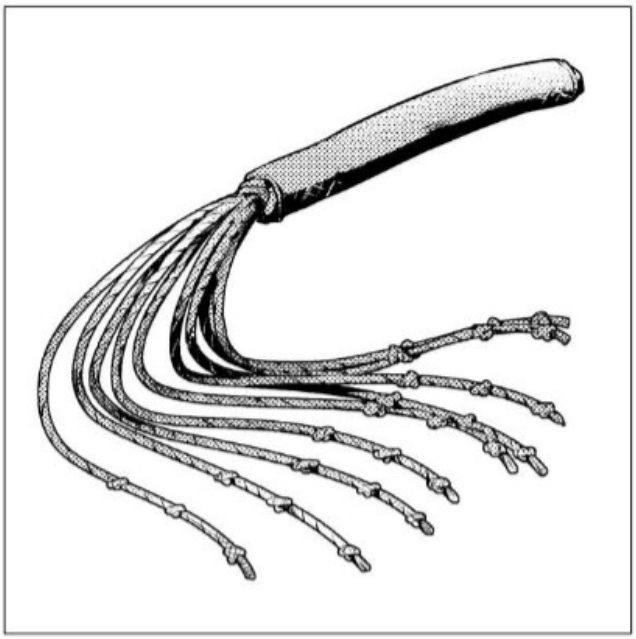


Illustration:未琴圭

ムチ打ち

処刑場から一般家庭まで幅広くサポート

古今東西を問わずに、ムチでの刑罰は、あらゆる場所で行われてきました。ムチの種類や力加減によって与えるダメージを自在に変化させることができます。諸外国では一般的に使われているところも多く、まだまだ現役の刑罰です。



使用地域　世界各地
年代　中世～現代



両手を天井から伸びた紐でひっぱり、倒れられない長さに調整し、足も縛ります。



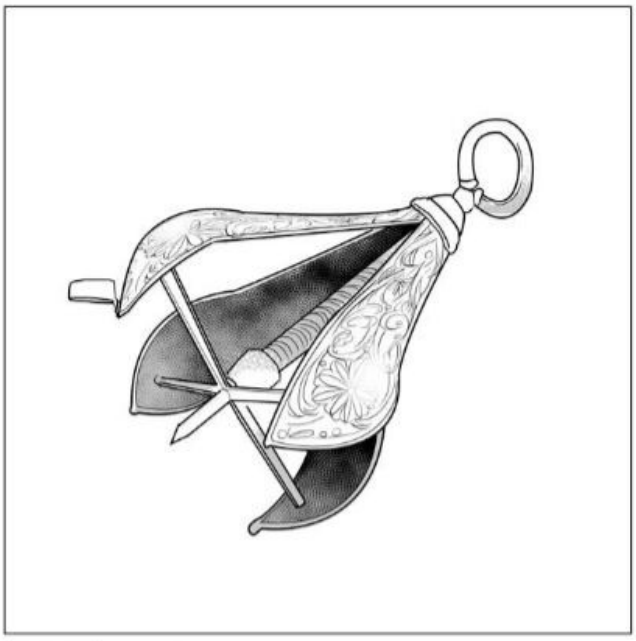
背中から足にかけてムチを打っていきます。無駄なけがを少なくするために、水で湿らせた綿布をお尻に巻くこともあるそうです。


Illustration:dieepzee

苦悩の梨

プレゼントに最適？
綺麗な梨のアンティーク

美しい装飾品のようにも見えますが、実は中世ヨーロッパで開発されたえげつない拷問具です。口、肛門、膣などに挿入し、ネジを回して器具を広げ、内部から穴を拡張します。使用する部位によって器具の大きさが変化するとのこと。仕組みそのものはさほど変わっていないものが、現在にも残っているそうです。



使用地域　ヨーロッパ
年代　中世



閉じたままの状態で、女性なら口、または膣にねじ込みます。器具を入れる部位は罪状によって変わります。神を冒涜した者は口、悪魔と契ったとされる女性には膣、というように罪にちなんだ器官に適用されます。



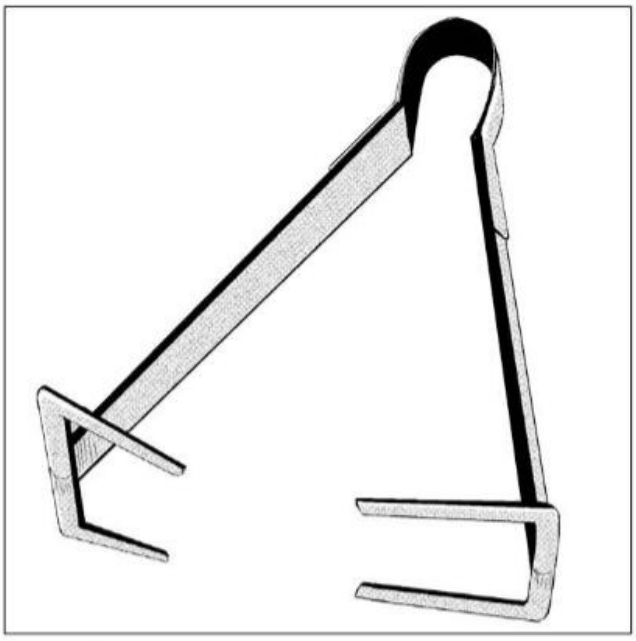
挿入後は手元のネジを操作します。このネジを回すことで、器具の先端が徐々に開いていき、挿入箇所の内部を拡張します。外側からは拷問の様子が見えにくいのですが、内側からの痛みは凄まじいものだったそうです。


Illustration:風花

乳挟み

女性の尊厳も押しつぶす

その名の通り、女性の乳房を器具を使って挟む拷問で、苦痛を与えると同時に恥辱を与えたそうです。イスラム圏やトルコ、中国等で使われており、『トルコ式拷問器具』とも呼ばれているそうです。中には、胸を挟んだ器具を天井から吊るしてじわじわと引っ張っていくこともあったそうです。



使用地域　世界各地
年代　中世



衣服を剥ぎ取り、胸をさらけ出させます。両手を後ろで拘束し、胸を反らさせます。



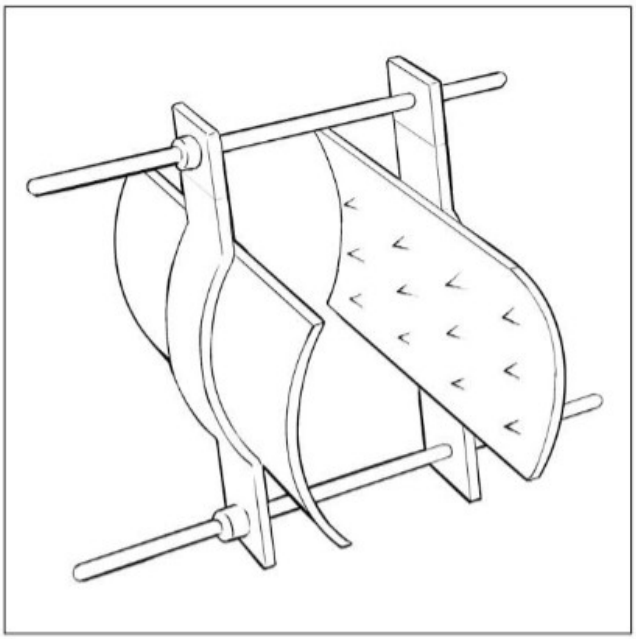
専用の拷問具、もしくは棒や板で乳房の上下を挟み、押しつぶします。


Illustration:夏八

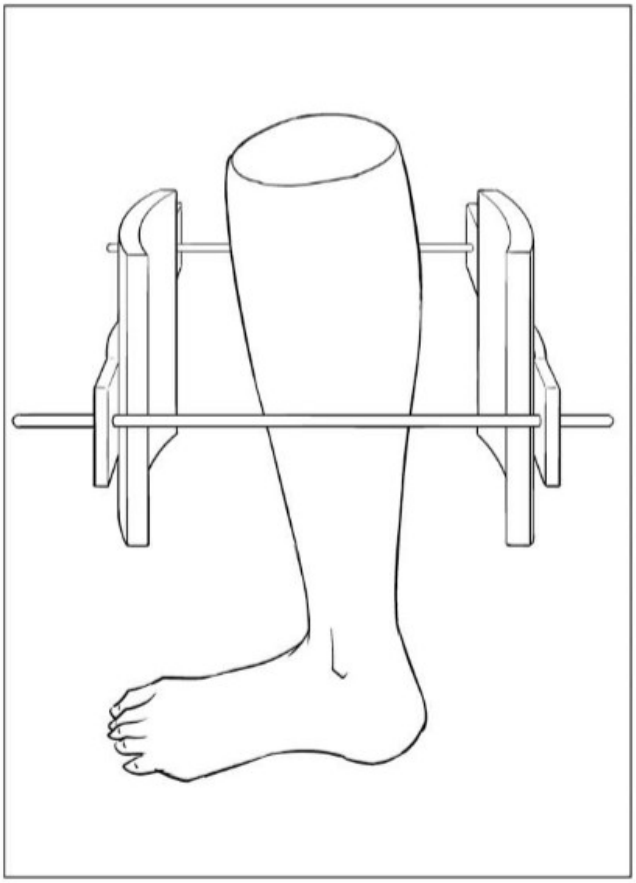
スパニッシュブーツ

スペインで使われた鉄でできた長靴

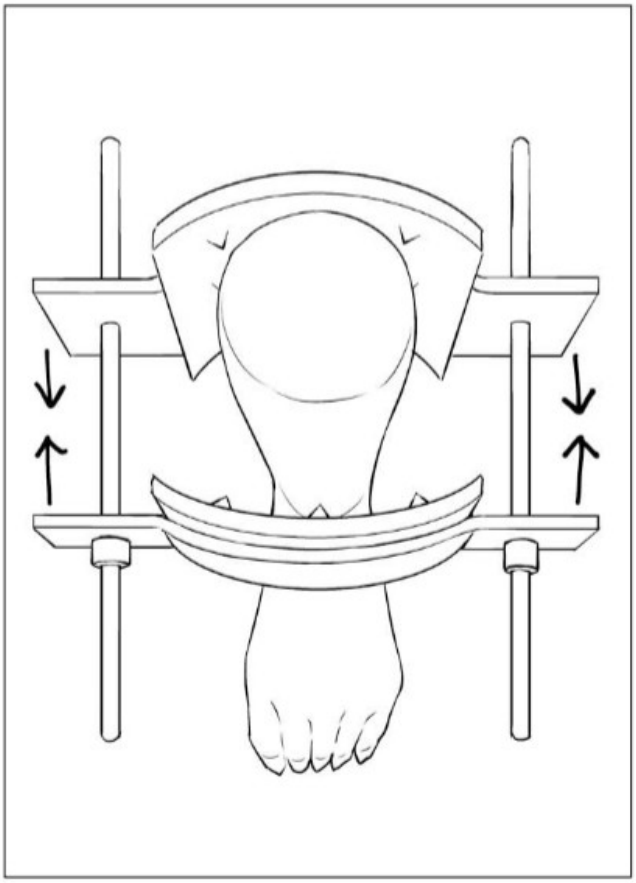
すね当てのような形状をしたこの拷問具は、膝下に万力のような器具を装着して圧迫します。中に突起がついており、圧迫し続けると約15分で気絶すると言われています。さらに、火で炙ったり、熱した油を注いだりと、さらに追い打ちをかけられることもあったそうです。この拷問は骨が砕けるまで続けられたと言われており、犠牲者がその後、自分で歩くことはなかったのかもしれません。



使用地域　スペイン
年代　18世紀



上半身を椅子に拘束し、ネジを緩めた器具を脚に装着します。



器具についているネジを閉め、脚を圧迫していきます。そこから器具を叩いて振動を与えたり、わざとネジを緩めたりし、苦痛を増幅させていきます。



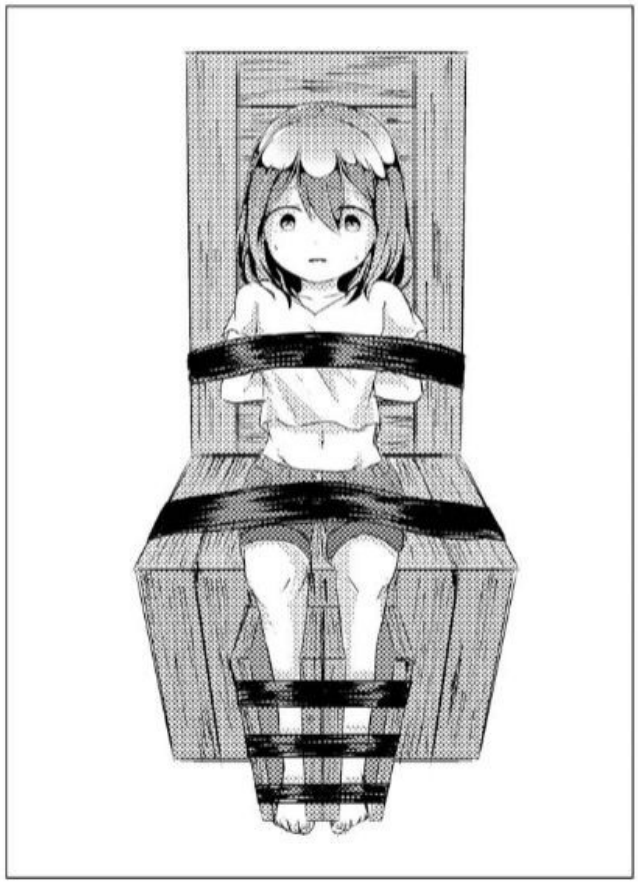
Illustration:あつ村まいこ

編み上げ靴

使用地域 ヨーロッパ　年代 18世紀

こんなオシャレはしたくない!

膝下を板で囲い、太ももの間に楔を打ち込んでいきます。固定した状態で内側から徐々に圧迫することによって、筋肉や骨にダメージを与えます。やがては血液の循環不全が起き、神経が麻痺してきて、機能障害を引き起こす場合も。通常打ち込まれる楔は4本で、特殊な場合は8本も使われたそうです。処刑前に編み上げ靴による拷問を受けた者は、自力で処刑台まで登れないほどだったといいます。



椅子に座らせて拘束します。板を添えて膝下を囲い、革のロープで編み上げて固定しましょう。楔を打ち込んでいる最中にロープが解けないようにかなりキツく縛られるので、既に圧迫によるダメージを受けている状態です。



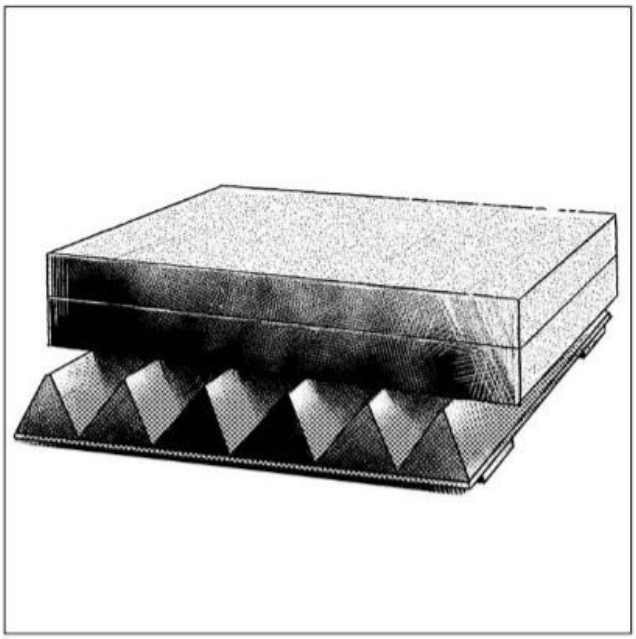
膝から太ももの間に鉄の楔を打ち込み、膝下の間隔を広げます。楔の厚さによって打ち込まれる楔の数は変化します。徐々に神経を圧迫していき、激しい疼痛を与えてます。


Illustration:未琴圭

石抱

最後まで耐えたら無罪放免

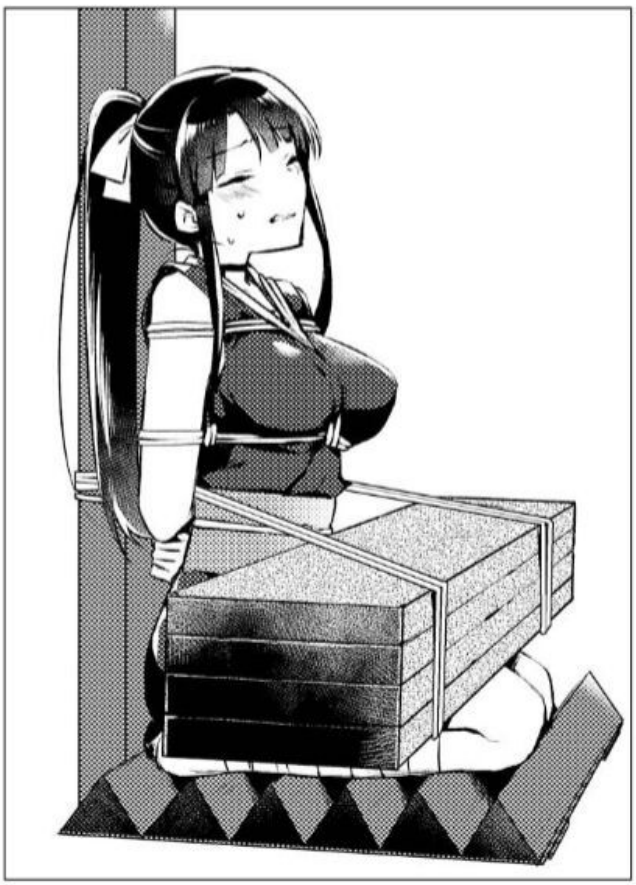
「算盤(そろばん)責」とも呼ばれる、日本独自の変化を遂げた江戸時代を代表する拷問方法です。三角形の木を並べた台の上に座らせられて重しを置いていきます。この重しは石板を使用されることが多く、1枚が約50キロ程あったとのこと。大抵は5枚ほど積まれると気を失うそうですが、立会の医者が続行可能と診断すれば、叩き起こされて続行されます。中には10枚乗せても意識があったという人もいたといいます。



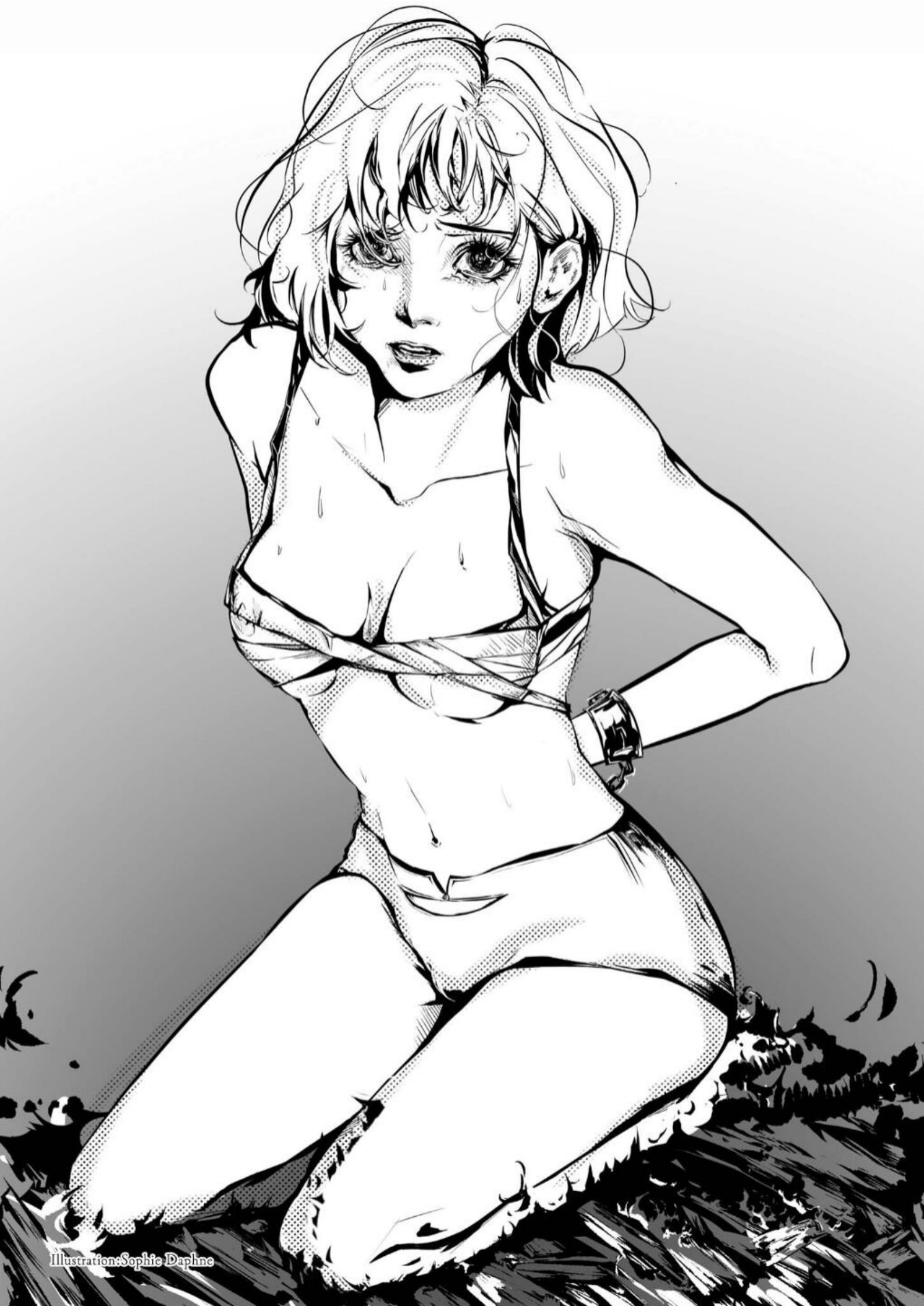
使用地域　日本
年代　17世紀



松を加工して三角形にしたものを敷き詰めた台の上に正座をさせましょう。少し仰け反る体勢になるように台の後ろの柱に手を縛り付け、身動きがとれない状態にします。この時点で既に脛に激しい痛みを感じています。



正座の状態で固定したら、太ももに石板を乗せます。石板を左右に揺らしてさらなる苦痛を与えるのもいいでしょう。ある程度まで積んだら石板を縛って固定してください。また、石板を積む時は胸部を圧迫しないように注意してください。


Illustration:Sophie Daphne

炭火責め

使用地域 日本　年代 17世紀

人間でバーベキュー

かつて日本で行われた、赤く熱した炭火の上に座らせる拷問です。苦痛に苛まれながら、自身の足が焦げる匂いをかがされる残酷な拷問とも言われています。一見、足だけが焼けそうですが、その場から逃げ出そうと暴れだし、それを役人が押し戻すため、全身に火傷を負うことのほうが多かったそうです。現在でも、神事などで炭火の上を歩かせることがありますが、あれは安全性に配慮されているため負傷者はほとんど出ません。



火がついて赤く染まった炭を床にばらまきます。風を送るなどして、炭の温度を調整します。



炭の上に犠牲者を連れてきて、その場で正座をさせます。逃げ出そうとした場合は、近くで待機している役人が棒などで押し戻します。



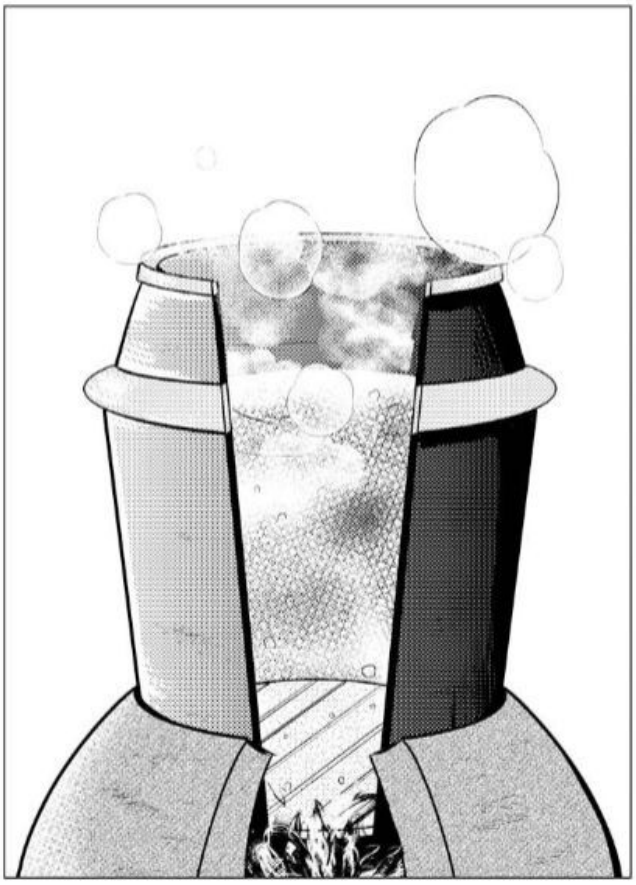
Illustration：風花

釜茹で

使用地域 日本　年代 16～17世紀

おちおち浸かってられない恐怖の五右衛門風呂

古代の中国で盛んに行われていた拷問です。熱せられた湯が入っている釜の中に入れて茹でるという単純な方法ですが、悲惨な光景が広がっているのは想像に難くありません。日本では戦国～江戸時代にかけて執行されており、豊臣秀吉の命により三条河原で大盗賊の石川五右衛門一派が釜茹での刑にされた逸話は有名です。名前は違いますが、海外でも同様の方法が存在し、フランスやドイツではワインで煮られることもあったとか。



釜を用意し、水を入れて熱します。釜には色々な種類があり、釜全体が鋳鉄製のものと、釜の底だけが鋳鉄製で円筒刑の木桶で囲われているものなどがあります。



身動きが取れないように体を固定し、釜の中に入れます。ぬるま湯の状態で釜に入れて徐々に温度をあげるやり方と、最初から沸騰している熱湯に入れるやり方があります。



Illustration:蒼司

ユダのゆりかご

ピラミッドは
いつでも狙っている

両足を縛られて吊るされて、ピラミッド型の台座の上で苦しめられる拷問具です。お尻に力を入れていないと台座が刺さってしまうので不眠不休でお尻に力を入れなければなりません。致命傷を与えることはありませんが、下半身を露わにしているのと、肛門や膣を責められるため、精神的にも激しい苦痛を味あわせたと言われています。ちなみに、一部の地域では現代でも使われているそうです。



使用地域　ヨーロッパ全域
年代　中世～近世



下半身の衣服を取り払います。腰にベルトを巻いて、そこに天井や壁から伸ばした紐を何本か使って宙吊りにします。



両足を紐で拘束して、天井から伸ばした紐で持ち上げます。そして肛門や膣の下にピラミッド型の台座を配置し、ゆっくりと下げていきます。その後、数日間同じ体勢を維持させましょう。

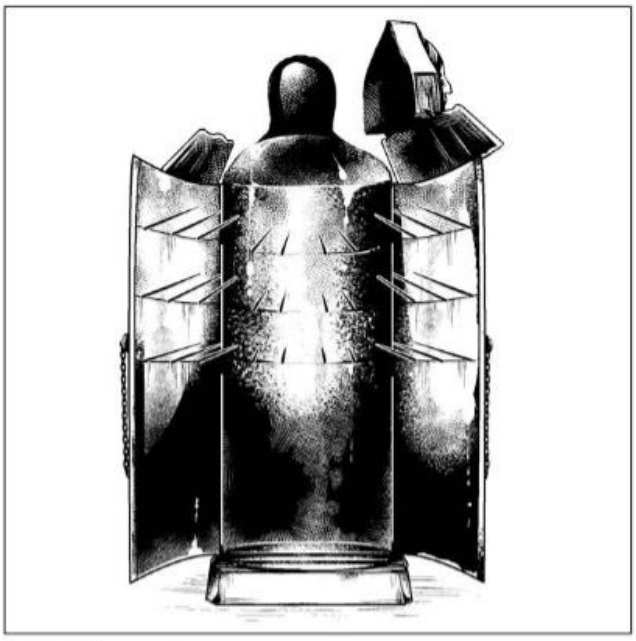


Illustration:未琴圭

鉄の処女

犠牲者を抱きしめ、生き血を絞る

アイアンメイデンとも呼ばれる、超有名拷問器具。内部にびっしりと針が仕込まれており、その中に人を入れます。針は致命傷になる箇所には刺さらない構造になっているため、長時間苦痛を味合わせられました。その後、犠牲者は空洞になっている器具の底から落とされたと言われています。ただし、針に刺さった人を落とすことができたのか等、不明瞭な点が多いため、本当に使用されていたのか疑問視されています。



使用地域　ヨーロッパ
年代　16世紀



鉄の処女の観音開きとなっているトビラを開けて、その中に犠牲者を入れます。



左右のトビラについている針が刺さるように閉めていきます。その後、数日間はトビラを閉めておき、苦痛を味あわせます。

Column

拘束マニュアル 縄編

日本では拷問の際に縄を使用することが多く、身分や性別によって結び方が違うなど細かいルールもありました。時代の変化に伴って内容が細分化され、さまざまな縛り方が編み出されました。

手錠縛り



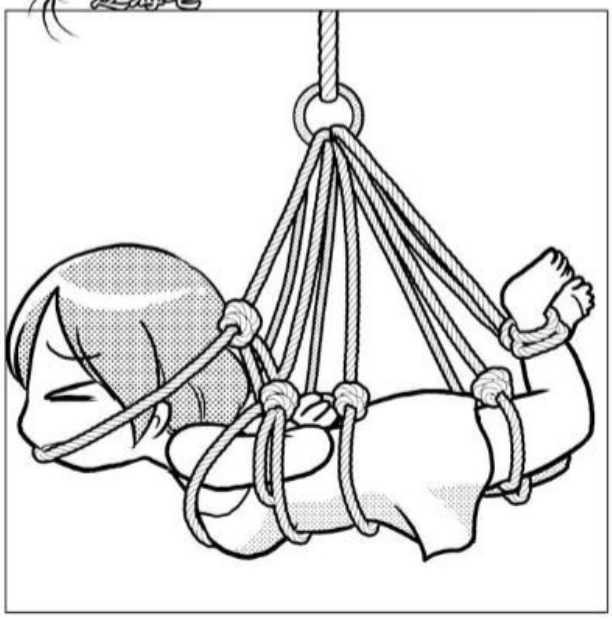
両手首を体の前でひとまとめにして縛ります。手錠を掛けられている状態なので腕は動かしづらくなりますが、それ以外は自由に動くので拘束力は高くありません。

後手縛り



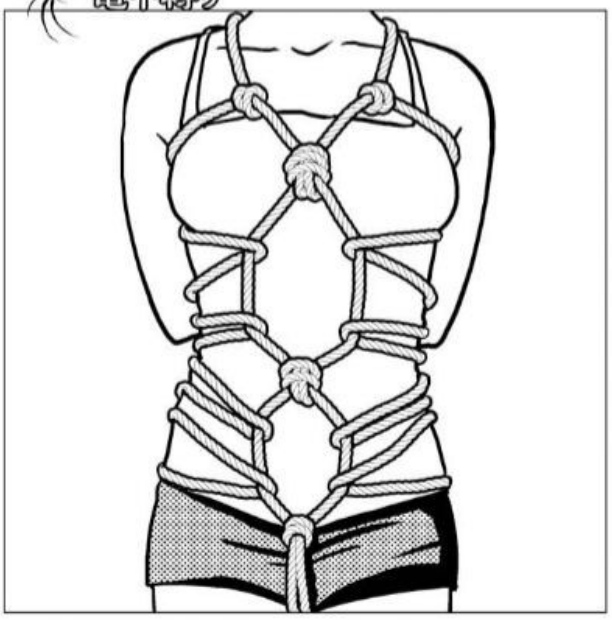
両腕を体の後ろに回し、肩と腕をそれぞれ縄で縛って固定させます。体の前側へ縄を通す際に、羞恥心を煽るように胸部を強調して縛ることも可能です。

逆海老



うつ伏せに寝かせた状態で両腕を後手に縛り、足首も縛って吊り上げます。長時間この体勢で吊るされ続けると呼吸困難に陥ります。

亀甲縛り



結び目が亀の甲羅の模様に似ていることから、このように呼ばれています。もともとは、米俵などの大きくて偏りやすい荷物を縛るための、実用的な縛り方でした。



Chapter.03
精神&肉体的な苦痛

精神と肉体を同時に責める拷問具は準備に手間がかかりますが、相手をじんわりと追い込みます。そのため、姿だけで恐れられるものもあります。最終章では、そんな拷問具を紹介します。


Illustration:小鳥遊ソラ

審問椅子

拷問では欠かせない
棘いっぱいの椅子

魔女裁判にかけられた人を拘束するために作られた椅子。全裸に近い状態で座らせ、致命傷にならない程度に殴打したり、重りを抱えさせたりと苦痛を味わせながら尋問をしたそうです。ただ、この椅子は体重が分散されるため針が完全に刺さることがなく、それほど痛くないという話もあります。どちらかと言えば、心理的な恐怖を与える為に作られた椅子なのではないかと言われています。



使用地域　ヨーロッパ
年代　13～18世紀



裸に近い状態まで服を脱がし、その上で拷問椅子に座らせます。



椅子についている拘束具で、動けなくなるように固定します。場合によっては揺すったりして痛みに追い打ちをかけることもあるようです。


Illustration:たちまよしかづ

トラの椅子

使用地域 中国　年代 近世

変形の基本は徐々に慣らすこと

中国でおこなわれていたこの拷問は、かかとにレンガを積み上げ、徐々にひざをありえない方向に変形させていくものです。後遺症の残る拷問なので現在では廃止されており、中国では「トラのように恐ろしい腰掛け」という意味の文字で表され、恐怖の対象として見られていました。また、拷問台のような機能もあり、殴打されたり電気を流されるなどの行為も行われていたそうです。



長椅子にひざを伸ばした状態で座らせて、上半身全体と太腿を紐で固定します。太腿の紐は若干余裕を持たせて縛っておくと後々の行程がやりやすくなるでしょう。



伸ばした足のかかとの下にレンガを積み上げると、太腿が固定されているので、ありえない方向に足が曲がっていきます。更に苦痛を与えたい時は、かかとの下にレンガを追加していきます。


Illustration:DigDug

車裂きの刑

車輪があればなんでもできる

その名の通り車輪を使って行われる拷問の名前です。当時の木と鉄でできている丸くて重い車輪は、最初に殴打することに使われ、その後に側面に括り付けて晒すために利用されたそうです。この刑に車輪が利用された背景には、車輪が太陽を連想させるシンボルだという風習から、天への供物として考えられていたそうです。



使用地域　ヨーロッパ
年代　中世



輻(スポーク)と呼ばれる部分を利用しながら、車輪の側面に手足を編み込んで固定していきます。



人を括り付けた車輪に柱を付け、地面に柱を立てて固定します。この刑が最盛期の頃には、その姿が市民たちの格好の娯楽として見世物になっていたそうです。


Illustration:ちんじゃおろおす

三角木馬

SMの必須アイテムも、元流は超残虐だった

現代での三角木馬といえば、SMプレイの必須アイテム。そのため、人体に傷を着けないよう安心安全を心掛けて作られています。しかし、かつてキリシタンが弾圧されていた頃に使われた三角木馬は、角がより鋭利になっており、自身の体重だけで股を傷つけてしまいます。その苦痛は今では考えられない強烈なものでしょう。



使用地域　世界各地
年代　中世～近世



犠牲者の上半身を縄で縛り、そこに天井から垂らした紐を括り付けておきます。この時に腰辺りを吊し上げてしまうと、うつ伏せになってしまいます。その状態では、あまり効果が発揮されないので注意が必要です。



犠牲者を跨がらせ、ギリギリ股間が木馬に食い込むように垂らした紐の長さを調整します。すると、犠牲者の股はどんどんと木馬に食い込んでいき、徐々に苦痛を味わうことになります。


Illustration:まつやま登

鋸挽

使用地域 日本　年代 戦国～江戸時代

2泊3日を鋸と過ごす

首まで埋まった状態で近くに鋸を置かれ、周りの人は自由に斬ってもいい、という刑罰です。主人や親を殺した罪に対して課せられたと言われています。戦国時代では、実際に鋸を挽く通行人も居たとのことですが、江戸時代に入ると誰も手を下さなくなり、晒し者にするという意味合いの方が強くなっていきました。そのため、鋸挽で晒される人の周りには、他の人を侵入させないためのロープや監視が配置されたそうです。



予め半分くらい地面に埋めておいた箱に人を入れます。その後、首だけが出るように、土をかけます。



首のみを晒した者の左右に、鋸を置きます。さらに、「希望すれば鋸で引いてよし」と書かれた衝立を設置します。



Illustration:富士高なす

スカフィズム

使用地域 ペルシャ　年代 古代

自分がわからなくなる腐の柩

かつてペルシャで行われてた、世界一残酷と言われている刑罰です。まずは、船で板挟みにして身体の動きを制限します。そして、ハチミツやミルクで虫を引き寄せ、時間をかけてじわじわと恐怖や苦痛を与えます。大小様々な虫に体を触まれ続ける上に、自身では糞尿の処理ができないので、刑が終わって船を開けた時の光景は卒倒ものでしょう。



手と足を通せる穴を空けた木のカヌーに人を入れます。その上にもう一隻のカヌーを乗せて、動けないように上下のカヌーをしっかりと括り付けます。



カヌーに括り付けた人に、大量のハチミツやミルクを飲ませ、さらに外に出ている手足、顔にハチミツを塗りたくります。その後、汚い池か炎天下に放置します。ハチミツとミルクは毎日与えましょう。

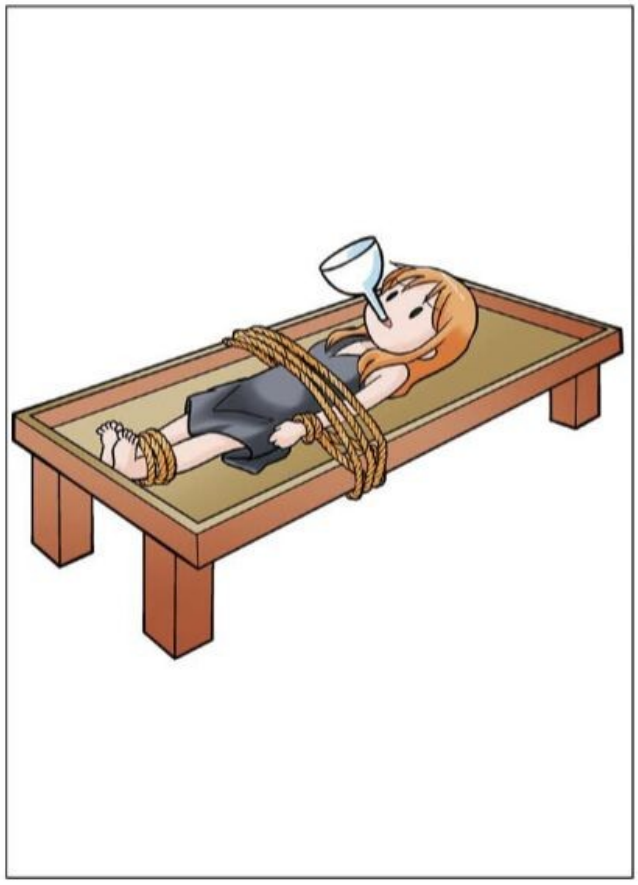

Illustration:まつやま登

水責め

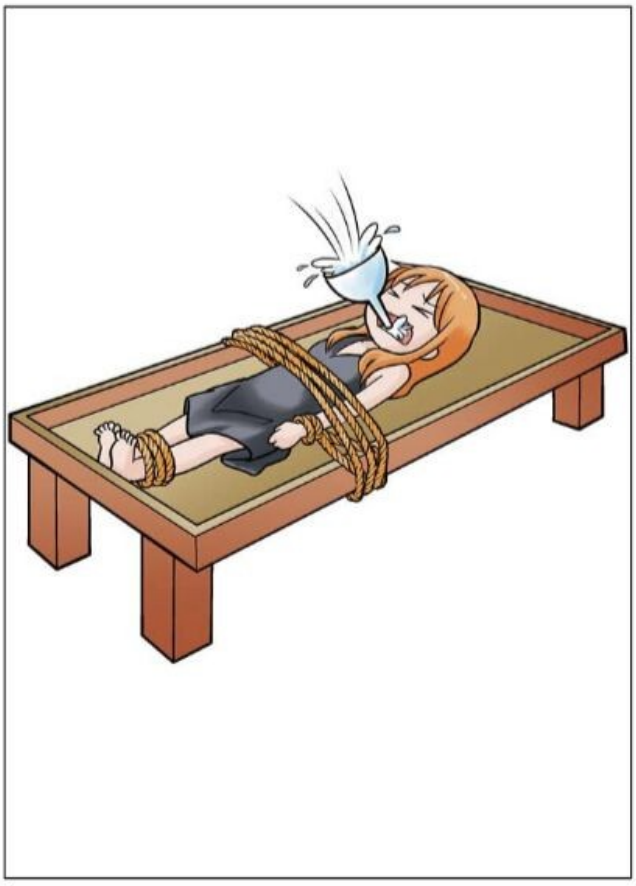
使用地域 世界各地　年代 中世～現代

終わることの許されない飲み放題

いちばん身近で簡単と言われる拷問です。主なやり方は、漏斗を口に入れて無理やり水を飲ませていきます。その他にも、逆さ吊りにした人を井戸や池で上げ下げする方法や、額に一定の感覚で一滴ずつ水を垂らして精神を混乱させる方法などもあります。いずれも拷問の形跡を残しづらいことから、秘密警察などで今なお実施されているそうです。



犠牲者を仰向けに寝かせて固定し、口を開かせて漏斗をセットします。この時に漏斗が浅いと、犠牲者が口から水を吐き出してしまうので、むせ返らない程度に深めに入れましょう。



犠牲者の鼻をつまみながら漏斗の中に水を入れていくと、息ができなくなり、水を飲まざるを得なくなります。その後もどんどんと水を飲ませ続け、お腹の中がパンパンになっても続けます。


Illustration:こそり

水責め椅子

使用地域 ヨーロッパ　年代 16～19世紀

うるさい人達を黙らせる椅子

犠牲者を椅子に縛り付けた後、シーソーのような装置を使って川や池などに漬ける拷問です。おもにうるさい女性や、喧嘩をふっかけた人などを対象とし、民衆の目に晒される屈辱を与えました。さらに、厳冬期では、冷たい川に漬けられるので、寒さにも苦しみます。16世紀後半のヨーロッパ全域に普及した際には全ての町に備え付けることが義務付けられていたそうです。



犠牲者を椅子から動けなくなるよう拘束します。川か池などの底が深い水辺に、シーソーのような装置をセットし、犠牲者を縛り付けた椅子を括り付けます。



シーソーのような装置でテコの原理を利用しながら椅子を持ち上げます。そして水の中へ沈めていきます。溺死してしまわないように、加減をしながら、上げたり沈めたりをくり返します。



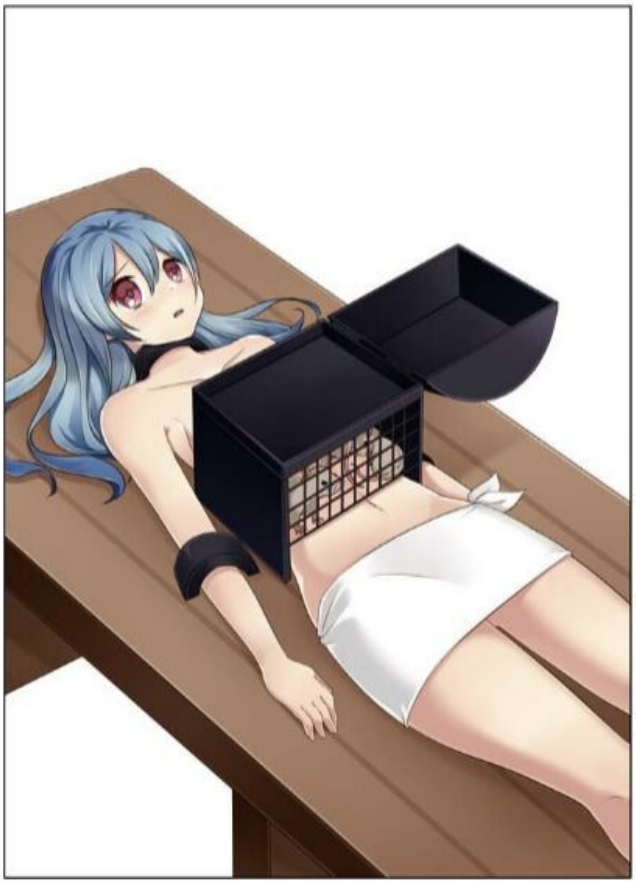
Illustration:富士高なす

鍋責め

使用地域 ヨーロッパ　年代 15～18世紀

小さくたって生きたいんだ

熱さから逃れようとしたネズミが、ついには犠牲者のお腹を食い破ってしまう、という拷問です。15世紀から18世紀にかけて、宗教裁判で使われていたこの拷問は、当時のネズミがペストなどの感染源と知られていたため、精神的な苦痛も与えられたそうです。ブリキの箱と大きな釜を使うことが多く、地域によっては『大釜の刑』とも呼ばれています。他にも底のない鉄籠や、大きな鍋が使われることもあったそうです。



仰向けに寝転んだ人の腹の上に、底のない鉄籠をくくりつけます。そしてその中に飢えたネズミを数匹、入れていきます。



鉄籠の上で火を炊くと、ネズミはその状況から逃げようと必死に逃げ道を探しだします。お腹に噛み付いたり爪で引っ掻いたりをくり返します。



Illustration:ジェームス

山羊責め

使用地域 ヨーロッパ　年代 中世

あの平和そうな顔から恐怖が蘇る

長時間、山羊に足の裏を舐められ続ける、ユニークな拷問です。しかし、その実情はユニークとは程遠く、残酷なものとして伝えられています。塩分を求めて舐め続ける山羊のザラザラした舌はヤスリのような働きをし、くり返し舐められると、皮膚が削られていきます。そして、血液にも塩分が含まれているため、引き剥がさないかぎり、終わることはありません。最初はくすぐったいと思う拷問も繰り返せば、辛く痛いものに変わります。この拷問を知ってしまうと、山羊を見る目が少し変わってしまいそうです。



椅子に座らせて、動けないように固定します。この時、足の裏がちょうど山羊の頭の高さに来るように調整しましょう。その後、足の裏にたっぷりと塩水を塗りたくります。



部屋に数匹の山羊を放ちます。山羊は塩分を欲するため、足の裏に塗りたくられた塩水を舐め始めます。最初はくすぐったく感じるかと思いますが、徐々にそれが苦痛へと変わっていきます。


Illustration:富士高なす

ヘビ責め

使用地域 日本　年代 16～18世紀

ヘビ好きにはたまらない天国

かつて日本で行われた、ヘビが大量に入った桶の中に入れられる拷問です。当初のヘビ責めは、ヘビを口から無理やり飲み込ませるものでした。時代が経つにつれて、キリシタンの弾圧のためにこの形になったといわれています。桶のなかで暴れまわったヘビは逃げ場を探して、局部にまで入り込んだという記述もあります。



人が入れるくらいに大きな樽や壺の中に、数十匹のヘビを入れます。この時、毒を持っていないヘビを用意すると、長い時間相手に恐怖を与えることができます。



衣服を脱がし、両手両足を紐で縛ります。ヘビが入った桶の中に人を入れて、塩を混ぜたお酒や熱湯を撒きます。するとヘビが驚き、体を締めつけたり、噛み付いたりと襲ってきます。


Illustration:Emanon123

リッサの鉄柩

使用地域 ヨーロッパ　年代 中世

暗い狭い痛い、3つ揃った孤独の寝室

名前の通り、リッサという地で使われていた鉄製で棺桶のような形状をした拷問具です。ギリギリ中に人が入れるサイズの鉄の柩に閉じ込められ、暗い、狭いといった感情を感じる事となります。さらにトビラが体を圧迫していくので、徐々に痛みも加わっていき、人が恐怖を感じる要素が盛りだくさんです。ただ、残っている資料が乏しく、現存する資料でも、内容のズレが大きいと言われる幻の拷問具でもあります。



器具の蓋を開け、その中に人を押し込みます。その後、蓋を閉めた後ネジを使って、内側からどんなことをされても開かないように外側から固定します。



ゆっくりと蓋についたネジを締めていき、中に居る人を圧迫していきます。この際に、すぐに潰れるほど圧迫するのではなく、数日をかけて蓋を落としていきます。そうすることで、飢えや恐怖を与えることができます。


Illustration:富士高なす

振り子ギロチン

使用地域 ヨーロッパ　年代 19世紀

恐怖の刃は目の前に

大きな刃物が徐々に体に迫ってくる恐怖を味あわせる拷問です。慣性の法則で常に動き続ける巨大な刃のついた振り子が、少しずつ身体に近づいていきます。その恐怖はこの上ないことでしょう。ナポレオンがスペインに進軍した際に使われたという記述があるそうですが、実際に使われていたのかははっきりしていません。しかし死神の鎌のように徐々に迫ってくる姿は、人に恐怖を植え付けるのには最適でしょう。



ギロチンを滑車などの装置を利用して持ち上げます。犠牲者を装置に寝かせて、手足や腰などをそれぞれ縛り上げて動けないように固定します。



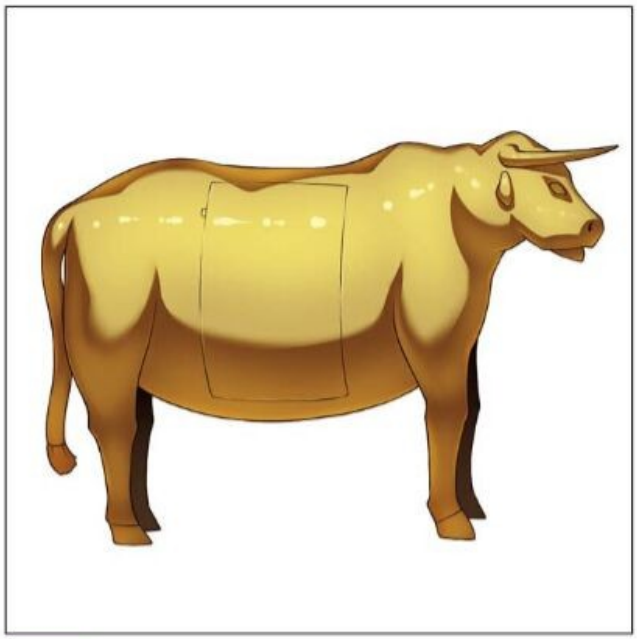
装置で持ち上げていたギロチンを離して、振り子の原理で動かしはじめます。時間が経つにつれて刃が下がってくるためその音と動きは恐怖心を煽ることでしょう。


Illustration:Emanon123

ファラリスの雄牛

その鳴き声は苦悩の叫び

牛の形をした像の中に閉じ込められて、火で熱せられる拷問です。火を使った処刑方法に、火刑(火あぶり)がありますが、そちらは火傷で死ぬよりも先に酸欠で気絶することが多いと言われています。しかし、このファラリスの雄牛は、外に繋がった筒から空気が供給されるため、苦しみが長く続きます。中の人が空気を吸う際に鳴る音は、助けを求めるものか、恨みを吐いたものか、どちらにせよ悲痛なものだったでしょう。



使用地域　ヨーロッパ
年代　紀元前500～3年



器具の横または背中にあるトビラを開き、無理やり中に押し入れ、トビラを閉じて鍵をかけます。燃やすための木材等を準備しておきましょう。



火をつけ、像を加熱します。中に入れられた人は内部の管から新鮮な空気を吸おうとし、牛の鳴き声のような音が響き渡ります。

作家紹介



冬壱もんめ

Twitter @fyicmnm

Pixiv 5813660

拷問台というオーソドックスなものを描かせていただきましたがこれからどんな目に遭ってしまうのか！　ぜひ想像してください。



dieepzee

Twitter @26hApzOo6z8oYIZ

かわいそうな少女、エロくて大好物です！



DigDug

Pixiv 491101

今回描く際に拷問具について少し調べたのですが思ったよりエグいやつが多く、アレコレ想像して怖くなったりしてました。



Emanon123

Twitter @emanon123_78m

URL https://kpwds390.wixsite.com/mysite

こんにちは、Emanon123です。拷問具は使用上の注意をよく読み、用法・用量を守って正しくお使い下さい。



lilish

Twitter @lilishmuchimuch

Pixiv 48905

指錠、引きずりを担当しました。女性と拷問具は、何とも言えないフェチズムを感じますね。



Sophie Daphne

愛されることは幸せではない。

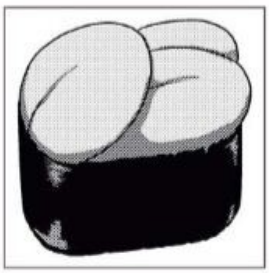


あつ村まいこ

Twitter @atmrmaimai

Pixiv 25706431

女の子と丸いものを描くのが好きです。拷問と少女というゴツさと柔らかさの組み合わせ……なかなかおいしいですね。



海栗

URL http://unikurage.sakura.ne.jp/

ごうもんであそんではいけません。



小倉小雪（おぐらこゆき）

Twitter @ptc___xx0

「人に見せづらい絵を描く」という子供の頃からの夢をついに叶えることができました。本当にありがとうございます。



風花

URL http://kazahana-hina.tumblr.com/

とても楽しく描かせていただきました！　縄で縛られている女の子、最高です……。



河南あすか

Twitter @KananAsuka

Pixiv 494981

眠らせない拷問が個人的には一番イヤです……。拷問は2次元オンリーであってほしいですね。



こそり

Twitter @kosori

Pixiv 27917

楽しく描かせていただきました～！気に入っていただければ幸いです……！



ジェームス

Twitter @jms_pnt

Pixiv 930878

新たな扉を開けた気がします。ありがとうございました。



蒼司

普段あまり女の子を描かないのでとてもいい勉強になりました。これを機にもっとうまく描けるように頑張りたいです。



小鳥遊ソラ

Twitter @soramyon

URL http://5cmcube.wixsite.com/sora

自分は痛いの苦手です……！



たぢまよしかづ

Twitter @taditadi

Pixiv 25332

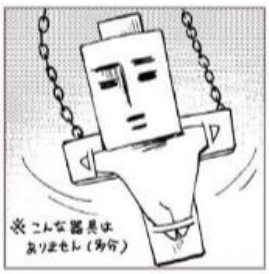
虎の椅子を描かせていただきました。拷問！　いたそう！　ですね……！この後彼女はスタッフがしっかりとマッサージしました(多分)。



ちんじゃおろおす

Twitter @chinjao0308

イラスト参加させていただきましてありがとうございました。



夏八

同じ名前同じ機能でも微妙に違う形状のものが多様にあったり、奥が深いですね。ぜひお気に入りを見つけてみてください！



富士高なす

Twitter @nasu_fuji

Pixiv 2665415

今回のお仕事で、「拷問に抵抗はありますか？」と聞かれ耳がおかしくなったのかと戸惑いました。楽しく描かせていただきました！



まつやま登

Twitter @bloodpet82

Pixiv 13799

拷問がテーマですが、タイトルを「猫」に変換するだけでほのぼのとした気分になれました。猫責め、猫抱き、猫詰め……。癒し。



未琴圭

Pixiv 3649884

貧乳派です。巨乳も好きです。



鳴奈

Twitter @meina0902

今回は貴重な機会をありがとうございました。初見の情報が多く大変勉強になりました。どう周りに宣伝しよう……。



編集　土方敏良
編集・製作　株式会社パルプライド
デザイン　小椋博之、佐藤由美子

発行人　原田 修
編集人　串田 誠
発行所　株式会社一迅社
〒160-0022　東京都新宿区新宿2-5-10　成信ビル8F
編集部　03-5312-6132
販売部　03-5312-6150

発売元：株式会社講談社（講談社・一迅社）

Printed in JAPAN
ISBN 978-4-7580-1566-0
©2017 Ichijinsha